

# 「真実の宗教」 (十八)

—— 私にとって報恩とは ——

櫟 暁 講 述

## 〈開式挨拶 佐々木玄吾護持会会長〉

おはようございます。護持会会長の佐々木玄吾と申します。宜しくお願い致します。

私は、護持会会長と申しまでもですね、今日まで第二十回の報恩講になるわけですけれども、この報恩講について、私はですね、この年表を見てみますと、最初の一回目、二回目は報恩講の会座に参加させていただきましたけれども、三回目以降からずっと欠席で、今回第二十回まで、実際には三回しか出席していないことがわかりました。

又、今日出席者の名簿を見ますと、私、目につきましたのはですね、照誠寺の建部ご住職が、出席されるということがありましてですね。この照誠寺さんというのは、光照寺の親寺にあたるお寺ですね、そのご参加を頂いて、一緒に報恩講の法要に遇わせていただくということを、大変うれしく、有り難く思っています。

それから、午後には櫟先生のお話があります。この櫟先生も、さっき、年表を見ましたら、第三回目から今回まで、今年で十八回ですね、この光照寺の報恩講にご出席頂き、ご法話を頂いて、それが、「真実の宗教」という形で、手に残っています。

私もそのお話の内容については、送って頂いていますから、わかっているのですけれども、実際には、本当に頂いているということではありません。

蓮如上人はですね、ただ仏法は、いかに不信であっても、「いかに不信なりとも、聴聞を心に入れて申さば、御慈悲にて候うあいだ、信をうべきなり。ただ、仏法は、聴聞にきわまることなり」(『蓮如上人御一代記聞書』聖典八八九頁)、と言っつていらっっしゃいます。

今日ですね、本当に私も八十才になりましたけれども、櫛先生のお話を聞かせて頂いて、「いかに不信なりとも、聴聞を心に入れて申さば、御慈悲にて候うあいだ、信をうべきなり。ただ、仏法は、聴聞にきわまることなり」と、蓮如上人がおっしゃるように、しっかり聞かせて頂きたいと思います。

皆さんと一緒に、聴聞できるということを、大変うれしく思っています。どうぞ宜しくお願ひ致します。

## 〈住職挨拶〉

どうも、皆様、ようこそおいで下さいました。今そこにいられる方は、高校時代、同じポート部の伝統の厳しさを共にやって過ごしてきた、そして今日まで続いている友人で、井山孝さんです。世間の友達として、仏法に来てくれる唯一の私の友です。本日は法の友として、又、皆様と共に報恩講が勤まりますこと、大変うれしく思います。

先生、どうもありがとうございます。先生のお話が始まる前に、例年で申しますと、櫛先生の講師の御紹介ということをお話させていただいているのですが、例年のように、時間をちよつといただいて、お話をさせていたただきたいと思っております。

この度の報恩講は、非常に記念すべき報恩講の節目でございます。お渡ししました袋の中にも、「光照寺二十周年の歩み 報恩講二十回記念」という冊子、記念年表が入っておりますが、愚庵を落慶して、報恩講を一回、二回、三回、と数えながら、二十回目を迎えたという、こういうことの記念すべき節目でございます。

佐々木玄吾先生から、報恩講二十周年記念になるので、年表を作ったほうがいいのではないか、というご提案がありまして、私は、さて、と思ったのであります。何故かと申しますと、私の歩みは、遅々としておりますし、そんな自慢できる歩みでもないし、とても書ききれないし、良い

とど取りはできないし、悪いところは隠しておきたいし、色々、こう思うわけですが、私が死んだら、私の年表を誰か書いてくれるのではなからうかと。書かない時は、私はその中の歴史から消えていくのだらうと。書いてくれれば、ちよつと、このお寺の歴史の中に残るのではないだらうか、という思いで、誰かが作るものだと思っていたのです、年表というものは。それを引き継いでということになるかと思つたのですが、玄吾先生が、年表を出したほうがいいということ、ちよつと忸怩じくじたるものがあつたのですが、「わかりました」と、こう云つて出来たのが、この年表でありました。副住職が編集長で、一応私なりの考え方を伝えて、また、玄吾先生が思つている年表というような資料を集めたりして、年表といつても色々ですから、どこまでということもありますし、玄吾先生が考へている年表というものを、まず色々な資料から考へてみて、検討しながら編集してくれという、こういうことで、私は、報恩講が二十回勤まる中に聞法会をし、それから、愚庵から発展し、今日までの道場としての変化、それから生まれる人といつても、みな書ききれないので、寺族という中に絞らせていただいたような形でございます。本当は、もつともつと書きたかつたのですが、実は、年表を書くために、私もあちこち資料を引っ張り出して、結局活用したのは、一項目、二項目くらいでした。その資料も、私の一生までと思つたりして、なかなか、自分史を書くのも難しいということもありますけれども、自分の二十年の背景は、ある面、一生ですから、一生を背景としたような総括とも挨拶に書いてありますけれども、どこま

で資料を出したらいいのだろうか、ちょっと躊躇いたしました。

私も先ほど朝、役員の方が集まった時に、そのことを申したのですが、この二十年という節目を過ぎて、来年に入っていく、報恩講を終わって、次に進んでいく、それを英語で、「graduation」という、「卒業」という言葉が、一番いいのではないかと。「卒業」という意味は、卒業するともに出発である、それが同時に、意味があるというのが、英語の辞書に書いてありましたので、卒業で終わりではなくて、終わりが即ち出発であるという意味が、「卒業」という、「graduation」という意味があるそうでございます。英語で云わなくても、別にそうだと思いますが、卒業で終わりということはないわけですが、卒業することで出発していくわけですが、改めて、「graduation」という意味を、辞書で引いてみると、そういうことが書いてありましたので、そうだなあと、卒業して有頂天になって、それでおしまいということではなくて、それを担って、新しく出発していく意味が重いと感ずまして、そんな意味を持って、二十年を卒業すると同時に、新しく出発していきたい。そういう出発の旗印といえますか、どうやって進んだらいいだろうか、それは、「仏法弘まれかし 念仏よ興れ。」の旗印以外はないわけですが、もっと具体的に、二十年を過ぎた旗印をもう一本立ててみたいと、こう思っています、「真宗興隆」という流れを汲むわけですが、「真宗興行」ということもあるわけです。仏法を盛んにしていく、念仏を盛んにしていくことが、大事であり、人が大勢いるだけがいいのではなく、一人の信心を得る人を生み出すことが非常に

難しいものでありますが、そのことを担っているわけですが、その「仏法興隆」も、もちろんですけれど、「真宗興隆」、これは、蓮如上人がおっしゃっている言葉からいただければ、「真宗興行」という旗を掲げようと。副住職はこんなことを云ったのですが、「もし、坊主になっていなければ、吉本の芸人になっている。」って云い、「えーっ？」と思ったのですが、私も、お笑い系の遺伝子を持っているような感じがするのですが。吉本だと云うなら、私が、なんと半分の遺伝子が私からという、こういう非常に苦しいユーモアを云って、まあ、坊主になっていてくれてよかったと思うのですが。そこに共通するのは、「興行」、「吉本興業」というのと、「真宗興行」という中で、発音は同じですが、ちょっと意味が違うところ、旗印を掲げて、次の二十一年目に、また一歩、一歩、歴史を刻んでいきたいと。そして永遠に託そうと、こう思って年表を書きました。それから、二十年目だから盛大にお祝いをしようという思いも、ちらつとあったのですが、とてもとても、お祝いするような、浮かれたような気持ちになれないと。ですから、ささやかに、重く二十年目をやっていきたいと。ですから、例年のごとく、先ほど、『御伝鈔』がありました、型のごとくですが、型のごとく堅く受け止めながら、ちょっとこういうユーモアを混ぜながら、柔らかく進もうという、非常に難しい気持ちで、今日臨んでおります。

先ほどの声明も、声が出なかったのに、出ないのに声を出そうと、水を飲みながら、咳込みながら、やってしまつて、本当に自分も他力の教えをいただきながら、自力我慢だなど思いながら、

出ない声を張り上げていたような思いでした。浄土真宗は、坂東節という本当に大きな身体を揺すつての根本がありますので、関東の地にありますので、報恩講は、喜びと感動とを自ら偲いあげるのだという、こういう声明が、原点になっておりますので、浄土真宗のお東の声明は、非常に元気であるというものが、坂東節にあるわけで、そんな思いを込めて、ちよつと意気込んでやってみました。しかし、声が続かないというのは、やっぱり加齢というか、歳の思いを感じたことでもございました。

そんなわけで、年表を読んでいただければと思います。私の挨拶の中には、二歳、三歳の思いが、半分以上、三分の二を占めるような分量で、書いてあります。一歳、三歳の記憶があるのは、嘘だというけれど、本当の話でございまして、誰も信じてくれないので、記録に残しました。本当の話なのです。それが結局、最後の壮年期から晩年期と、なんていつているけれども、ほとんど一行か一行半で終わっているという、そんなような世にも不思議な二十年を総括し、一生を総括するような、挨拶文になってしまいました。私の云わんとすることを、汲んでいただければ有難いと思います。

それから、櫟先生のご紹介をしたいと思います。今回は先ほど、柳川さんからお話し下さいましたけれども、『歎異抄に』に仰ぐ現代人の救い」という小冊子を、出席した人のみ、副住職は、プレミアムと云っていましたが、プラスオンというか、おまけというか、来た人だけに特別な



ですよ、という意味でおあげいたしました。皆様というわけにいかないのです。何故いかないかというのと、やりたいけれども、お金がないというか、お金がかかる。文書伝道をしなくてはならないといながら、文章、文章とお金がかかるのです。テープを起こす人も大変。それから読む人も大変。聞く人も大変。云う人も大変。本当に活字一つは、大変な世界で一つの文章が来てくれるわけございまして、しかし、具体的にはお金がかかるというわけで、ということが現実なのです。だから、文書伝道、されど文書伝道でございまして、おあげしたい、有縁、無縁にあげたいけれども、限度がある中で、とにかく来た人におあげしよう。ちよつと残った分は、これと思う人に、櫟先生を知りたいと思う人に、特別に一对一であげようと、こんな思いで、柳川さんからいただきました。

それで先ほど、柳川さんからお話し下さいましたけれども、私においても、これは読んだら非常に驚きました。何故かという、櫟先生が、東京に来て初めて、私においてですよ、櫟先生は、東京に何度も来ていると云われると、おしまいなのだけれど。確か、私の記憶では、初めてなのですが、裏付けもあるのですが。要するに、東京、浅草の講堂で、先生がお話になったと思うのですが、真宗会館ではないと思うのです、二十六年前ですから。それで、その時の話がこれなのです。その時の裏話が、山上一宝さんという、教区には非常に素晴らしい妙好人がおられるのですが、その方が、「本物を連れてきたぞ。俺が見つつけてきたのだ。」と、そういう言葉で櫟先生を

触れ込んだのです。この人は失礼だなあ、偽物、本物を選別するような、そんな無礼なことがあるかと思っただけでも、「俺が見つけてきたのだ、本物を。」、それが櫟先生でした。こういうインパクトだったのです。だから、じゃあ、私も本物に会ってみようと、こういうことで、確か、照誠寺さんの一行と行ったのです。この度亡くなられた、照誠寺さんの役僧さんで、昨日、お葬儀があったのですが、六十一歳で亡くなられたのですが、その人と二人で座って、丁度会場のど真ん中に座って、櫟先生のお話を聞いたのです。その話した内容も、例えば、二十頁の「豊富の中の貧困」とか、「多人数の中の孤独」とか、この人は現代的に訴えて面白いことを云うなあと、佐藤さんと話しながら聞いた覚えもあるし、この先生は、瞬きしないぞと。人の目を見ているのに、ずっと瞬きしない。ドライアイにならないのか、なんてそういうことを、不遜にも佐藤次男さんと聞いて、その本がここになったということなのです。それで、確かにこの先生は目を瞬かない。私は剣道の剣豪の話の中に、どうしても試合の時に切り込むと、目を瞑ってしまうというので、切られてしまうというので、目を瞬かせない訓練が、トレーニング、修練ができないかというので、天井から日本刀を紐で吊り下げて、その剣先を見ながら寝るといって、目を瞑らない訓練をして、全くどんな試合に臨んでも、目を瞬かないという剣豪がいたというのを昔読んだ覚えがあり、この人、剣豪だわと。まさか、日本刀を天井から吊るして、剣先を見て寝ているのではないかと思っただけで、だけど人の目は、実際に見ると剣より怖いですよ。人の目は、どっち

かが目を逸らすか、瞬きするかが、勝負というような思いが実はあるのですが、剣先よりも人の目が怖いのです。しかし、目を見ながら、瞬かない先生、本物とはこういうものかと思っただけでも、ドライアイにならないのかな。最近先生、ちよつと瞬くな、ちよつと首を振るなどか、非常に歴史というのは、出遇いから変化を思うわけであります。大変先生を前に失礼なことを申しました。山上一宝さん流に云えば、本物は誰だといいなながら、私も本物に出遇いたいと云いながら、「ここに」本物を毎回、「ここに」なんて云って失礼なことですが、毎月お呼びし、報恩講にもお呼びし、この年表にも重ねたように、櫟先生をお迎えしているわけです。問題は、本物、偽物と云うのは、如来に向かえば、皆、偽物ですよ。仮なるもの、偽なるものであつて、本物は如来であつて、我々は偽物ですよ。仮のものであり、偽物である。そんなことで、だけどこの世界には、本物、偽物が飛び交うから、いやらしいね。まあ、そう思います。

それから、『歎異抄に』に仰ぐ現代人の救い、その中から先生が、現代における救いということを書いてくださった。これは非常に東京教区においては、重要なものだと思います。何故かという、先生は、鹿児島県の法泉寺を再建された方であり、三重のお生まれですが、戦争に行かれた後ですね、耳が爆弾の為か、耳が悪くなられて、そうして戦争では、本当に国のためだと思つていたのでしょね。しかし、敗戦の時に、何を依り処にしているのかわからなくなって、自殺までしようとしたというお話を聞きました。しかし、お寺の生まれであり、鹿児島の方を開教

する、荒れ寺を開教して、立て直したという力の人であります。しかし、失意の中にこれだというものが崩れたらね、戦前の人と戦後、皆あの時一億総鬱というか、その時鬱という言葉があったか知らないが、ノイローゼということがあったのですよね。今までこれだ、と思ったことが崩れると、思想的にも信念的にも崩れると、人間何が自分なのか、どう生きていいのかわからなくなるというのは、先生もそういう体験をされたのだなあと思いました。曾我先生に遇って、本当に念仏まことと、本当に目覚められたと、宗教体験もお持ちでありました。ですから、本当に戦前、戦中、戦後の中の寺に生まれながらもなお、この教えを広げようとする中に、そういう戦争というところに生きながら、失意を迎えて、なお真宗に曾我先生を縁としてひらかれた。だから櫟先生の先生は、やっぱり曾我先生ということになりながら、曾我先生の先生は、また清沢満之先生とか、そうやって、七高僧、お釈迦様、またお釈迦様のさとられた背景が、南無阿弥陀仏と、説かれた背景が、南無阿弥陀仏という、曾我先生の言葉が生きておられると、私は思うわけであります。

そんなことで、話せば長いので、例年にはない時間をいただいているわけですが、櫟先生のご紹介を毎年しているのですが、どう違った角度で、先生を御紹介できるかと今、思っ、難しいのですよ。こんな形でご紹介いたしました。先生は、確か、八十八歳、八十七、八十八くらいになられると思うのですが、ごめんなさい、人の歳を、先生の歳を、曖昧にしているという怠惰な

ことはないのですが、やはり、いつも来られる、いつもこの中に私達がいるということとは違うのですよね。本当は、吐く息、吸う息の間という、生死を生きている、そこを超えられるかという問題があつて、いつもと同じ、例年のごとく、型のごとくといいいながら、そうではない、そういう世界が櫟先生のお話を聴く中にもあるのではないかとこう思っております。そんなことで、「二期一会」は、茶道の言葉でして、仏法の言葉ではないのですが、基本的には通じるわけですが、本当にいつでも初めてお会いするとか、初めて読ませていただくとか、『正信偈』も暗記しているからではなく、初めていただくという、そういう気持ちがあつて、覚えていても経本を初めていただくがごとくいただけと、初め声明の先生に教わって、なるほどなあと。かえって諳んじているからとか、自分は知っているからとか、自分は上手だからではなく、初めていただくような形で、『正信偈』も、全てのお経も、なんでもそうなのだと聞いたのが、非常に印象でございます。ですから、いつもと同じではなくて、今生において、初めて櫟先生にお会いするような気持ちで、これからお話を、この記念すべき二十周年の報恩講に、お会いして、聴かせて頂きたいと思っております。よろしくお願いいたします。ちょっと長くて、失礼いたしました。

## 〈資料一〉

浄土真宗（浄土真宗の意味）

〈浄土真宗〉という語は宗名でなく、真宗聖典では、次のような本質的な意味で用いられている。

（一）真実の教え。阿弥陀仏の本願を説く『無量寿経』の教えのこと。（標列・教巻・化巻）

● 標列（一五〇―L十一）

大無量寿経 真実の教 ★浄土真宗

● 教巻（一五二―L三）

謹んで★浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について、真実の教行信証あり。それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。

● 化巻〈本〉（三四五―L十五）

四依弘経の大士、三朝浄土の宗師、★真宗念仏を開きて濁世の邪偽を導く。三経の大綱、顕彰隠密の義ありといえども、信心を彰して能入とす。（以上真実教）

◆ 私解 真実教は方便教（主として聖道門及び〈その他の哲学思想〉を含む）に対し、また一般世俗の邪義（名利愛欲追及 現世祈祷）に対す。

(二) 選択本願すなわち第十八願 (末灯鈔・高僧和讃)

● 末灯鈔 (六〇一—L九)

浄土宗のなかに真あり仮(ケ)あり、真というは選択本願なり、仮というは定散二善なり、選択本願は浄土真宗なり。定散二善は方便仮門なり。★浄土真宗は大乗のなかの至極なり。

● 高僧和讃 (四九八—B二)

智慧光のちからより 本師源空あらわれて ★浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたま  
う (以上 浄土真宗の根源)

◆ 私解 選択本願は諸仏・諸菩薩の本願に対す。

(三) 念仏往生 (一念多念文意)

● 一念多念文意 (五四五—L十六)

浄土真宗のならひには念仏往生ともうすなり

(浄土真宗の伝承)

◆ 私解 念仏往生は諸行往生 (『観経』顕説) に対す。

(四) 信心往生の教え (唯信鈔文意)

● 唯信鈔文意 (五五二—L七)

眞実信心をうれば実報土にうまるとおしへたまへるを浄土眞宗の正意とすとしるべしとなり。  
(浄土眞宗の本質)

◆私解 信心往生は単なる死後往生思想に対す。

(五)他力 (血脈文集)

●親鸞聖人血脈文集 (五九四—L三)

それ、★浄土眞宗のころは、往生の根機に他力あり、自力あり。(中略) (L六) 他力と申すことは、弥陀如来の御ちかいの中に、選択摂取したまえる第十八の念仏往生の本願を信樂するを、他力とは申すなり。如来の御ちかいなれば、「他力には義なきを義とす」と、聖人のおおせごとにてありき。  
(他力の救済)

◆私解 他力は自力分別によつて人生の根本問題を解決しようとする努力に対す。

(六)浄土成仏 (歎異抄)

●歎異抄 (六三七—L一)

「★浄土眞宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくとならいそうろうぞ」とこそ、故聖人のおおせにはそうらいしか。  
(他力の救済の因果)



◆私解 浄土成仏は人間の分別世界において悟りを開こうとする思想、言動に対す。

これらは、浄土門の真実の教え、浄土真宗の救済の原理、浄土真宗の根源、浄土真宗の伝承、浄土真宗の本質、他力の救済の因果を示しているのであって、宗祖親鸞においては〈浄土真宗〉（真宗または浄土宗）とは特定の宗派名ではなくて、阿弥陀仏の浄土に往生・成仏する道そのもの、その教えの本質的意味をあらわしている。そして宗祖親鸞は師の元祖法然に絶対随順していたから、宗祖親鸞の云う〈浄土真宗〉とは、元祖法然によって明らかにされた浄土往生・成仏を説く真実の教えなのである。

## 〈法 話〉

只今、ご住職様よりご丁寧なご紹介をいただきました、鹿児島教区法泉寺の前任職、樺暁でございます。今回は、光照寺様の開創二十周年記念の法要でございます、この頂きました『光照寺 二十周年の歩み』という印刷物の中に、私がお祝いの言葉を書かせていただいておりますので、これを朗読してお祝いいたします。

「貴寺が開創二十周年を迎えられた事を御祝賀申し上げます。御住職様始め御寺の方々は勿論、役員・門信徒御一同様の深甚の御精進と御懇念によるものと存じ、御慶賀申し上げます。

時あたかも宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌・元祖法然上人八百回御遠忌に当り、御一同様同心に疑蓋無雑の他力の信心をもって、真宗再興に邁進せられる事を遥かに念じ、祝詞といたします。」

鹿児島で書いたものでございますので、「遥かに念じ」と書いております。それで、先ほどご紹介にありました、この本ですね、これはそこにお座りになっている柳川さんに編集して頂いた。その最初の部分はですね、東京真宗同朋の会の白川繁利さん、この方は長い間、石垣島で製糖会

社の社長をしておられた方で、最近はもうお辞めになって、こちらにお帰りになっておられますが、この方が私の録音をほどこしてくださった。それが最初に第一部となっている。第二部は、柳川さんのご要望で、第一部だけではちょっと少ないと、なんか私に書き添えてくれないかというようなお話でございましたので、それなら何か書きましようと言って、今まで考えていたようなことを書いたものです。それで、真実の宗教ということを書いております。四九頁ですが、ちょっと見てください。ちょっと読んでみます。後ろから三行目です。

「宗教の定義は多くありますが、私は自分の信念に基づいて考えたとき、

①真の宗教は、人間の苦悩を除き、生きる信念を与える教えを説く活動そのものである。

（『歎異抄』に仰ぐ現代人の救い 四九頁）

つまり、真宗流に言うならば、南無阿弥陀仏はたらの用きです。活動そのものです。我々が宗教活動するのは、これは南無阿弥陀仏のお陰でさせて頂いておるのですから、ですから、自分たちがやっておるといっているのではなく、南無阿弥陀仏のお用はたらきを私たちは少しばかり担わせていただいております。こういうことでございます。それはどういう活動かと云ったら、すべての人を平等に救いたいということです。善悪・賢愚・老少・男女を分け隔てしない。

『歎異抄』の第一章に「老少善悪のひとをえらばず」とありますが、あれはたんに老少善悪だけでなく、全ての区別をえらばないということですよ。えらびたてしないということですよ。「えらぶ」は選挙の選ではなく、簡単な簡の字です。竹冠に間という字を書いた。分け隔てをしないということですよ。「老少善悪のひとをえらばず。ただ信心を要とすとしるべし。」あそここのところが有り難いことです。

私は、さつきご住職様から兵隊の話がちょっと出ましたけれど、旧軍隊なんていうのは閉鎖社会中の閉鎖社会、星で人がえらばれるわけです。彼は二等兵だ、彼は一等兵だ。この人は連隊長で大佐だと。人間で変わりが無いのに、襟につけている星で差別されるのです。こういう世界に私は二年近くおりました。

そして、曾我先生の教えで「えらばれる」という言葉を、初めて『歎異抄』の第一章の言葉でいただいた時に、絶対に平等だと私は思いました。絶対に平等ということは、なかなか人間の心ではできないのです。これは年寄、若い者という具合に、若い人は経験がないからまだ未完成だということに差別する。男女ということ、男は女性を差別する。女性はまた男にはわからない苦しみがあるのだといって、男性を差別する面もあるわけです。全部そうだとはいえませんが、それから、学問のある人、ない人。学問のある、ないというのは学問できる縁があった人か、どうかということで、それはなにも縁があるから偉いとか、縁がないから偉くないということ

はないのです。

全て浄土真宗の教えで申しましたら、煩惱具足の凡夫です。これはもう云うまでもないことなのですが、すべての人が平等にたすかるといえることがどういふことかと云いますと、ここに書いてありますが、

③ 真の宗教は科学技術・政治・経済では得えられない真の安らぎと満足を得る道理と方法をはっきり示し、不安を除く精神活動である。

（『歎異抄』に仰ぐ現代人の救い 五〇頁）

無宗教者は、どれだけ良い環境や条件で生きていても、真の安らぎと満足がない。二番目は、  
② 真の宗教は、人間をすべての束縛から解放する教えを説く。言い換えれば真の精神的自由が得られる道理を教えとして説く。

（『歎異抄』に仰ぐ現代人の救い 五〇頁）

この「自由」ということは、日本の憲法にも今日の日本国憲法の中にも、宗教の自由をはじめとして、思想言論の自由とか居住の自由とかいろいろな自由とかが規定されておりましてけれども、本当の意味の自由とは何かというと、救われたいという願いを持っているものが、何の障りもなく救われるということです。自由ということとは、云い換えればそういうことです。

『歎異抄』で云うならば、「無碍の一道」ということです。それは、民間信仰とか民族信仰にひっかからない。それから、魅力のある言論とか道理に合わない思想にひっかからないということ。魔界外道も障碍することなし。罪悪の業報を感じることあたわず」とは、どういうことかという、我々知らず知らずの間に罪をつくっているのです。罪をつくっているということは、私は、仏の覚りの世界から見られたら、我々の煩惱の生活は、全部罪です。罪というのは、国法上の罪ではありません。道理に反する生活行動をしているということ。罪です。

それで、もう一つ分かり易いことは、これは我々生きていくということは、他の生物の命をとって生きていることです。食文化などと云いますけれども、他の動物の一番大事な命を無理にとつて食べ物にしているのです、我々は。そういう罪深い暮らしをしておるものがどうしたら救われるか。

この間、さつきご紹介がありました私は、鹿児島県の日置市というところですが、台風常襲地帯です。それで、台風の情報が入ると、もうどっちに行くのかということが、一番関心があつて、沖縄から奄美大島から鹿児島県と宮崎県の沖を北東にというと、もうちょっと北に偏ると私の方にやって来るのです。よかったなと思う。自分の方に来なければいいと。ところが、一、二、三日前に東京に来たら、今度東京に来なければいいかなと思つて、まあ、一生懸命情報を見ていたら、東京に上がりそうだと思つたけれど、伊豆大島や三宅島の上を行つて、海の中を北東に行つてし

まったので、あまりたいしたことはなかった。このように台風ひとつ考えても自分の思いは利己的なのです。他の動植物の命をとるというほど利己主義はない。それが当然のことだと思っただけのことであって、仏の眼から見れば、罪にほかならない。罪をつくらざるを得ない私です。罪の報を受けて苦しまなければならないものが、どうしたら「罪悪の業報を感ずることあたわず」、そこに明るい、つまりお陰様でありがとうございます、という心でもって、生きられる世界をちゃんと人々にただけかと言ふ道理そのものが、浄土真宗です。真実の宗教とは、言葉をかえているだけであって、浄土真宗ということなのです。

それで、私は英語をあまり知りませんが、さっきも英語の話が出てきたので、宗教は英語で「religion」と云うでしょう。宗教のことを「religion」というのは、知っている人に聞いたら、神との再結合ということだそうです。あれは、西洋から来た言葉を日本人が明治時代に、宗教と訳した。ですから、そういう意味では仏教は宗教ではないのです。神をたてないのですから。絶対的な万物創造の神をたてないのですから。

仏教は、道理が真如とか法性とかね、道理というものが根本であって、道理を我々に説き聞かせるために、釈尊がこの世にお生まれになって、その道理（法）をお説きになったというのが仏教です。法ということが道理ということですから。その法に、我々は中々目覚めないので。自分中心の生活をしているのですから。自分の快樂追求が一番大事に考えているから。幸福とは何か。

私は、幸福ということは、自分の都合のいいことが、次から次からと出てくる状態を幸福だと云っていると思います。

ところが、人間は都合のいいこと一つ求めると、次は都合の悪いことが出てくる。自分の年齢のことを申し上げて恐縮なのですが、来年の三月十二日で満八十八歳になるのです。昔から、米寿という。ところが、この歳に親鸞聖人の七百五十回忌と法然上人の八百回忌が勤まる。私は五十年前の御遠忌に本山にお参りしまして、もう後の五十年の後の御遠忌には、もう到底命はないと。だから、最後の御遠忌と思つて、お参りした記憶があるのです。どうやらこの調子ですと、来年の御遠忌まで命がありそうです。この御遠忌に二回遇うということができそうになってきた。私の父は威張っていました。「明治四十四年の六百五十回忌と、それから、昭和三十六年の七百回忌と、わしは二回遇うたのだ。」と。「お前は、とても二回は遇えないだろう。」と、親が威張っておりました。そんなものかなあ、と思つておりました。

ところが、こうして命を頂いて、どうやら来年の御遠忌にお会いできそうな状態になっているのですが、そんなら、ただ御遠忌にお会いするということは、単に、記念法要にお参りすることができたということでは、だめなのです。これは、親鸞聖人と同質の信心を得るということにおいて、初めて御遠忌に遇う意味があるのです。常識的幸福追求の生活とは質が違ふ世界を生きられる。そういう意味で、私はこの資料を作っています。浄土真宗とは、これは宗派の名前ではない。



去年のこの本の始めに同じことを書いております。資料の「標列」という箇所、『聖典』は「総序」の最後の方（一五〇頁）を見て下さい。「大無量寿経 真実の教 浄土真宗」とあります。これは『大無量寿経』の教えが真実の仏法であり、それが浄土真宗である。宗派の名ではありません。後で、西本願寺さんが、浄土真宗本願寺派と称された。我々大谷派とか、あとの八派は、今でも真宗大谷派、真宗高田派、真宗仏光寺派等々。浄土真宗と名乗っておられるのは、西本願寺さんだけですけれど、とにかく一般には、宗派の名前として認識されておる場合が多いのです。ところが、宗派の名前ではなく、教えの名前なのです。「浄土の真宗」なのです。

これは、私が曾我先生に教えていただいた。浄土真宗というのは、ここに「の」の字を入れたらはっきりする。浄土の真宗。「浄土の真宗」は、法然上人が開かれた浄土宗、浄土宗の真実義である。これをやさしい言葉で云ったら、「まことのそこ」である。ご消息にこのような言葉がでてる。（『御消息集』五六六頁）「まことのそこ」とは、どういう意味かというと、これは喩えですが、コップの中に水を入れて、砂糖を溶いて、初めのうちは上まで甘いのです。けれども、だんだん時が経つと、下に砂糖が沈澱して、上の方は真水に近いようになってしまふ。そのいちばん底に、砂糖が沈んでいるでしょう。そういうことを考えたらいいです。「まことのそこ」というのは、つまり、我々が認識しておる、いわゆる常識的な意味での浄土真宗ではなく、法然上人が日本で初めて開かれた浄土宗の真実義が「そこ」なのです。その「そこ」を我々がいただく

ことが大事なのであって、上水だけとって浄土真宗がいただけだと思っただけだと思っただけだ、間違いだということ。」「まことのそこ」というのは、そういう意味です。

それで、私は浄土という教えはどういうことかと云ったら、我々を絶対平等にすくうというのは、浄土に往生させるということにおいて、初めてすべての人を絶対平等にすくうことができる。浄土に生まれさせることがないならばですね、これは精神統一してさとりをひらくということになるものですから、統一ができる聖者、仏法的才能の優れた行のできる人です。凡夫というのは、それができないで、日夜生活にバタバタしてですね、この宗教的自覚ということがはつきりしないで、一生終わってしまうという者です。

人間を二つに分けるとすると、聖者と凡夫ですね。また、凡夫を数多く分けることができますが、その話は複雑になりますので、やめます。聖者と凡夫。その聖者と凡夫が、共に浄土に往生できることにおいて、平等の救いが得られるのです。浄土ということがはつきりしないと、平等の浄土の救いが得られないのです。

それで、ここが一番難しいところです。浄土往生というのは、死んでから遠い所に引っ越しするような布教が、長い間されてきたのです。ところが、法然上人、親鸞聖人、清沢先生、曾我先生、こういう大先輩の方々、大聖人の教えを引き継いでこられた方々の教えを深くいただいてみると、浄土というのは、精神界なのです。我々が生きているこの世の中のような物質界ではあり

ません。これは、精神界です。その精神界というのを、もっと具体的に申しますと、光明の精神界です。

光明の世界とはどういうことかというのと、私たちにどんな暗闇が胸に起こってもです、いつでも溶けていく。つまり、「ほどける」ということです。蓮如上人は「ほとけ」と云われるが、親鸞聖人は「ほとけ」という言葉は使われないのです。何故かというのと、「ほとけ」という言葉は、疫病神様に類したような意味を持った言葉なのだ。だから「ほとけ」と云わないで「ぶつ」という。これは、漢語の「ぶつ」というのが正しい。「ほとけ」というのは、間違った了解においてできておる日本読みなのだ、親鸞聖人が云っておられます。

ところが、蓮如上人はそれをちゃんと知っておられるのですが、「ほどける」という意味にとっておられるのです。自分の胸にさまざま起きるところの煩惱妄念の「まつわり」（纏）がほどけていく。ほどけるということです。そういうように、蓮如上人は教えておられるのです。言語学とかいうものを、超えた世界で云っておられるのです。「ほどける」。我々の妄念妄想はたらによる拘りが全て溶けていくのは、南無阿弥陀仏という言葉の用きはたらによるのです。

私は、曾我先生に遇って初めて一九四六年に真宗門徒にさせていただいたのですが、曾我先生が南無阿弥陀仏は言葉になった仏だと云われました。釈尊は、この我々と同じ肉体を持って、この世にお生まれになった仏である。しかし、釈尊がお生まれになる以前から、言葉になった仏が

いらっしやるのだと。一般の人が、そんなことはおかしな話だといって批判する。然し、曾我先生は、「釈尊以前の仏教」と云われる。以前とは、一年前とか、二年前とかいう、そういう意味ではないのです、以前ということとは、それは、釈尊をして釈尊たらしめておる道理が、言葉となっておる。いつでも、どこでも、誰でも、どんな心が動いた時でも、称えられ易い言葉になっておる。南無阿弥陀仏と。日本人であろうが、外国人であろうが、称えられる。言語の不自由な人が、字でも書ける。漢字を知らない人は、仮名でもいい。仮名もかけない人は、ローマ字でもいい。また、黙って心で、南無阿弥陀仏と称えることもできる。そういう、つまり、いつでも、どこでも、誰でも、どんな心でも、称えられる言葉になった仏が、南無阿弥陀仏。その仏の用はたらきを、阿弥陀如来と申し上げる。

阿弥陀様といったら我々は、ご本尊を頭に思い浮かべるでしょう。阿弥陀様。今日、真宗のお寺のご本尊というのは、ほとんどこのお木像です。親鸞聖人は、木像、絵像を絶対だめだとはおっしゃっておりませんが、ご自分は、「歸命尽十方無碍光如来」という、十字名号を中心として、※註 五十七頁参照六種類の名号を本尊としておられる。「歸命尽十方無碍光如来」というのは、これは天親菩薩が『浄土論』の最初に「世尊我一心 歸命尽十方 無碍光如来 願生安樂国」(『浄土論』一三五頁)と云われた。そのお言葉の中に、南無阿弥陀仏の意味を漢語で表した、「歸命尽十方無碍光如来」というのが、これが大事なのだということを、親鸞聖人が感得されて、主として、十字の名号を

ご本尊として、礼拝しておられた。その他、九字名号とか、八字名号とか、六字名号とか、いろいろありますけれど、一番大事にしておられたのが、「歸命尽十方無碍光如来」という十字名号です。

先から申しますように、どんな障りも障りでなくなる世界を、我々にちゃんと回向してください。そういう用はたらきが、歸命尽十方無碍光如来。つまり、先に云いました言葉になった仏です。そういうことです。ですから、私たち、お寺にお参りした時でなくても、また、自分の家のお内仏にお参りしていない時でも、例えば、病院に入院しておつても、ご本尊がない所でも、南無阿弥陀仏と称えれば、いつも仏は私の前に仏がおいでになるということがわかるのです。名号とはそういう大事な用はたらきです。名号というのは、仏のお名前ということですから、用はたらき云つたら、言葉になって、我々を用はたらき続けに用はたらいてくださる。我々の救いを得させようと、用はたらき続けに用はたらいておられる仏を、これをお名号とも、念仏とも、称名とも、徳号とも、嘉号とも、皆言葉は違うが、南無阿弥陀仏ということなのです。

「円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信樂は、疑いを除き証を獲しむる真理なりと。」（『教行信証』「総序」一四九頁）

「総序」の文の一番大事な言葉です。それは、さつき開けてもらいました『聖典』を持っておられる方、見てください。一四九頁、七行目、

「かるがゆえに知りぬ。円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信樂は、疑いを除き証を獲しむる真理なりと。」

「円融至徳の嘉号」とは、南無阿弥陀仏のことです。円融至徳とは、一つも欠けたところが無い徳が円満しているということです。南無阿弥陀仏の用はたらきの徳ということに、欠けたところは無い。「円融至徳の嘉号」、完全円満成就ということでしょう。

ところが、理屈でなくて、我々がそれを深く自分が為に南無阿弥陀仏という言葉が用はたらいてくださっているのだということをお願いして、いつでも、どこでも、どんな心が動いた時でも、念仏称えられているかどうか、ということが問題なのです。存外、称えてないのです。

お参りする時に、儀式としては手を合わせて南無阿弥陀仏と称える。それは、習慣として真宗門徒はこういう具合にするものだということが、身についておる人はそれができるけれども、腹が立った時とか、人を憎んだ時とか、嫉妬した時とか、ひねくれた心が起こった時、いつでも、南無阿弥陀仏と称えられますか。

まあ、動、反動ということがあるのです。英語で云ったら、「action」、「reaction」。人が何か気に入くないことを云うと、直ぐ腹が立つのですよ。人が腹を立てさせるつもりで云ったわけではないけれど、こっちがそれに腹を立てているわけです。それが問題なのです。

「瞋恚しんにの煩惱が火のごとし」と善導大師が云われるのです。功德の法罪を焼くというのです。今までどれだけ長い間、仏法を聞いて有り難いと思っても、激しい怒りが起こったら、皆、焼けてしまう。そういうことが聖教にあります。私も実は、腹を立てる人間なのです。これも、ちょっとしたことにこう腹が立って申し訳ないことなだけけれど、それは仏様に対して申し訳ないのだけれど、自分の家庭で腹を立てるのです。

あの、社会生活している時は、辛抱する心がいくらか働くのです。こんなことで腹立てておいたら、とてもお付き合いが出来ない。仕事にならんという具合に思っ、腹を立てないようという心が働くのです。それで、ところが、家庭はブレーキが外れているから、ちょっと家内がどう云ったとか、子がどう云ったとか、孫がどう云ったとかいうことで腹を立てる。

私にも孫がいます。まごまごしているうちに、孫が五人もおるのです。その孫でもやっばり、癪しやくに障ることを云うことがあるのです。私がなんか話していると、「おじいちゃん、何、云ってるの。」と云うの。つまり、わからんことを云うな、というのです。「何、云ってるの。」というのは。「そりゃ、お前がわからんのだろが。」と云いたい心があるわけです。それが心の中で整理

されれば結構なのですが、すぐに煩惱が言葉になって出てくるのです。

身・口・意の三業ということを仏教では云いますよね。「身」というのは、身体というのは行動です。「口」というのは言葉です。くち。「意」というのは心です。心が動くと言葉になる。言葉で足りないと言葉になる。そういう生活をしているのです。そういう性癖が、意業というか、心の中でちゃんと整理がつけばいいのだけれど、整理がつかない場合が多いのです。ことに家庭ではそうなのです。皆さんいかがですか。家庭で私は腹を立てないという人、絶対に家庭では腹を立てないという人がいらっしやったら、ちよつと手を挙げて下さい。

八十七歳の爺さんと、七つ、八つの孫と喧嘩したって何にもならないのです。けれども、そういう喧嘩するような心が起こるわけです。そういうのが瞋恚しんにの煩惱というのです。火の如しと。自分でその火を消せないのです。瞋恚しんにの煩惱が起こった時も、それを、ご縁として南無阿弥陀仏と称えなさいと。南無阿弥陀仏を忘れると、浄土という尊い光明の精神生活ができませんよ、どうか南無阿弥陀仏と称えてください、我々は皆、南無阿弥陀仏と称えてたすかっきましたよ、というのを、先輩がちゃんとおしゃっておるといことを、本願の上でいったら、第十七願です。「諸仏称名の願」。あなたが南無阿弥陀仏と称えられるようになるのは、長い歴史があるのです。それは、たすからないものが、言葉になった如来の用はたらきをいただいて、たすかっきた歴史があるのです。それが第十七願の世界なのです。



私は、親鸞聖人が第十七願ということを云うてくださるのですが、法然上人は第十七願ということをおっしゃらない。法然上人の教えは第十八願が中心なのです。ところが、親鸞聖人は『教行信証』『信巻しんのまき』を著わす前に、『行巻ぎょうのまき』がある。西本願寺さんでは「行巻ぎょうかん、信巻しんかん」という読み方をする。我々大谷派は、どういうわけか知らないけれども、「行巻ぎょうのまき、信巻しんのまき、証巻しょうのまき」といって、読み方が違うけれど、中は同じことなのです。

なぜ、「行巻ぎょうのまき」というのがあるのだろうかあと私は思いました。「行巻ぎょうのまき」というのには、「大行釈」、  
「他力釈」、それから「一乗海釈」、「正信偈」という、大別すれば四つになるのです。南無阿弥陀  
仏という言葉は、どういう意味内容を持っているか。この言葉を称えるということは、どういう  
救済が実現するかということが、書いてあるのが大部分です。つまりこれが「行巻ぎょうのまき」の「大行釈」  
です。「他力釈」というのは、他力というのは、如来の本願力であると述べてあります。南無阿  
弥陀仏の用はたらきは、本願力なのです。

人の力を借りることを他力といって、政治家がいい加減なことを云うでしょう。私の知っている  
住職が、ある大新聞に投書をした。「他力本願ではいかんと書いているが、他力というのは親鸞  
聖人が如来の本願力、ということでありまして、人の力を借りたり、そういう依存という意味で  
はありません。なぜ、貴社のような大新聞社が、間違った意義を記事として載せるのですか。」  
と投書をした。そうしたら、返事がきた。「新聞は、聖典ではありません。世間で云われている

常識的なものの云い方を、ニュースとしてお伝えする仕事でありますので、あなたの云われることもごもつともですが、それを承諾することはできません。」と返事がきたということを聞いています。他力ということは、そういう誤解がずっと一般的に続いているわけです。

それで、親鸞聖人は他力本願というよりも「本願他力」と云われた。『和讃』の中に、そう書いておられます。他力本願を逆転してというよりも、それが正式なのです。本願他力。我々が、他力本願、他力本願と誤解した言葉の使い方をします。本願他力という言葉が、『和讃』（四九一頁）の中に出てきます。本願が即ち、他力なのです。本願他力。その本願力をよりどころにして、我々が自分の目覚めを確実にさせて頂くということが、他力の信心です。そこをどこをはずりさせなくてはいけないのです。人の云う間違った了解を、当たり前のように思って、人々がこう云っておるといようなことでは、だめなのでして、だれが何と云おうとも、私の周囲の人が全部そう云っても、いや、そんなことは、私は信じません。私は、本願力というは、如来の大きな私を目覚めさせ、私をたすけてくださる本願のお力を、他力と深く信じております。私の周囲の人が、全部間違ったことを云っても、私はそれに動じないようなことが大事なのです。それが、信心決定ということです。

それで、自分の信心がそこまでいっているかどうか、自分で尋ねて試してください。自分以外の人、全て人の力を借りることを他力だといっても、「いや、私はそう思いません。私は親鸞

聖人のお言葉を深く信じ、他力は本願他力、如来の本願力であります。私は、この力をいただくなくては、救われません。」ということ、はつきりと云えるような人間となっているかどうかです。

それで、曾我先生が、他力の信心ということが、昔から使われた言葉ですが、これは、仏力による自覚の成就ということだと。仏の力によって、自覚ができる。ところが、それを反対する人が、坊さんにもいる。自覚、自覚というが、浄土真宗には救済ということがあっても、自覚というのではないはずだといって反対する人がいる。今でもたくさんいるのです。自覚といったら、自ら覚るということだ。我々は、覚れないのだから、仏様に救われるということはあるけれども、自覚ということは、あり得ないのだという反対する人がいるのです。我々がそんなことに惑わせられないようにしなくてはならない。自覚ということは、自ら覚めるということと、自ら覚める得られるということです。人から強制されなくても、ちゃんと南無阿弥陀仏という言葉の用はたらきで、自分に目覚めが得られる。

それをもっと具体的に話しますと、だんだん歳をとるとですね、夜中に目が覚めて、トイレに行くでしょ、トイレに行った後、直ぐに寝付きますか。寝付けないでしょう。私も早く寝る。晩に仕事をすると疲れるものだから。夕食をして、ちよっとテレビのニュースなんかを見て、横に

なるともう寝ていくのです。そうすると、午前一時半頃、目が覚めるのです。午前一時半。それで、トイレに行つて、眠れないのです。しばらく。眠れないと、いろんな事が子供の時のことから今日まで、一杯頭の中に出てくるのです。母親と言ひ争つたとか、兄弟喧嘩をしたとか、そういうこととか、学校でいじめられたり、いじめたりしたとか、いろんな思いが、走馬灯のごとく、と云つたら一番分かり易いか、八十七歳にもなつて、今から取り返しのつかぬ話です、そうは思つても。それが出てくるのです。ますます眠れない。あの時、こうしておればよかつた、あの時こんなことを云わねばよかつた。今から謝ろうとしても、母親はこの世にいないと。そういうようなことを思う。「樹静かならんと欲すれども風止まず、子養わんと欲すれども親待たず」という言葉がある。私は、その言葉が本当に身に沁みています。

曾我先生が、「葬式は、孝行の始まりです。」と云われた。親が亡くなつてしまえば、孝行できないはずなのに、「葬式は、孝行の始まりです。」と云われた。それだけ親が生きている間は、不孝してきた。親が亡くなつて、初めて自分が不孝息子だったということに、少しずつ気づかせてもらつて、もうどうすることも出来ないのに、親のことを思うような、そういうことです。事実ね。そういう妄念が起つた時も、南無阿弥陀仏を称えるのです。念仏申すと、これらのことは皆自分の妄念妄想だということがわからせていただいて、単に自分の親ということではなくて、今、この南無阿弥陀仏の用はたらきとして、還相回向してください。その親と会えるのです。

南無阿弥陀仏。それはありがたいことです。

「他力というは、如来の本願力なり」ということを話しておつて、こんなに長くなつてしまつたのですが、その後、「一乗海釈」というのがある。「行巻」の「一乗海釈」というのは、この本願の教えが、仏教の一番根本の、ただ一つの根本義だということをあらわすのが、「一乗海釈」。二乗、三乗あることなし。というのは、仏教に二つも、三つもない、ということです。

それは大体、親鸞聖人が、九歳の時から二九歳の時まで、比叡山におられたでしょ。その当時の日本の仏教の教団の中で、支配的な立場をとっていたのが、比叡山天台宗か、あるいは、奈良の興福寺かです。『歎異抄』第二章には、「南都北嶺にも、ゆゆしき学生たち」（六二六頁）という言葉が出てくるでしょ。それは、天台宗・法相宗の学者。それで、その中で天台宗は、法華一乗と云うのです。法華経が絶対唯一の仏教だといって、それを学問的に証明し、又、それを僧侶が会得する修行をしておる。それが、比叡山延暦寺。元の名前は、一乗止観院と云つたのです、延暦寺のことを。一乗止観院ということは、根本的な一つの天台の教えで、精神統一ができる仏教だど。やさしく云つたら、止観院ということは、妄念妄想が完全に止まつて、悟りの世界に到達できるという意味です。一乗止観院と前は云つていた。

ところが、親鸞聖人は、比叡山に二十年おられる間にですね、何を知られたと云つたら、自分がこの法華の教えではたすからない凡夫だということに気がつかれた。それで、叡山の中にも浄

土教があるわけです。浄土教というのは、皆さんご存知の源信僧都の横川、比叡山でいったら端っこの方ですね。北の方の端っこの方の実に寂しい所で、普段、そこに念仏衆という人たちが集まって、常行三昧堂ですつと日を決めて修行をして、内陣の周りを回って、念仏を称えて修行する。そういうグループに親鸞聖人が入っておられたのです。

ところが、親鸞聖人は、どれだけ一生懸命、念仏を称えて、不断念仏の修行をしても、自分の煩惱が完全になくならない。そういうことを深くわが身の上を感じられて、悲しまれた。その頃、比叡山には、法然上人の名声ということが伝わっておったんだが、簡単に山を下って、法然上人の所に行こうというようなお心が、急には起こらなかった。ところが、どんなにしても、自分の力で精神統一して、さとりが得られないということに深く気づかれ、悲しまれて、そして、法華一乗という教えは、観念の教えだということに気がつかれた。観念ということは、人間のある精神状態の時に、わかったような気がする。観念というのは、ドイツ観念論というのが、観念という字ですが、仏教の観念とは、ドイツ観念論のイデアとはイメージが違う。観念というのは、精神統一をして、ある一時、さとりを開いたと同じような思いが、一時的に出てくるという。それを観念という。ところが、観念というさは、長続きしないのです。修行から離れたら、普通の人間になってしまふ。それで、親鸞聖人は、この観念のさとりでだめだという、自分は救われないという、つまり、法華一乗というのは、絶対的な救いではないということを、比叡山二十

年の間に知られて、法然上人のお弟子になられたのです。

そこで初めて、法然上人の選択本願ということをお教えられたその教えが、身にぴりつと響いた。つまり、『法華経』による救いではなくして、『浄土三部経』と、世親菩薩の『浄土論』による救い「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という、この教えだということに気がつかれた。それが、二十九歳の時であったということが、皆さんご承知のことです。そこで、後ほど書かれた『教行信証』に「一乗海釈」があります。「一乗海釈」とは、法華一乗ではなく、誓願一仏乗だと。阿弥陀如来の本願が、根本の一つなのだと。仏教はこれなのだということ。私、昔、オートバイに乗っていた。自動車の免許を持たないので、オートバイに乗っていた。スズキという自動車、オートバイの会社、今でもあるでしょう。あそこに「コレダ」というオートバイが出ていた。私は、それを聞いてこれだ、「一乗海釈」は、仏法はこれだ。そういうことがわかった。オートバイに乗っていたら、そういうご利益があった。『これだ。』法華一乗とは違うのだ、『誓願一仏乗だ。』『これだ』、ということをお親鸞聖人が、「他力釈」の後に「一乗海釈」というものをつくって明らかにせられた。

ちょっと休憩させてください。

## 〈休憩〉

それでは再開いたします。先ほどは、「行巻」ぎょうのまきのお話を申し上げておりました。「他力釈」、「一乗海釈」というところまでまいりました。最初は、「大行釈」でありまして、長いお言葉で、南無阿弥陀仏という言葉が、絶対平等の救いを実現する言葉であるということをお話して、南無阿弥陀仏の救いというのをお話して、如来の本願力による絶対平等の救いであることをお話して、「一乗海釈」を出されまして、仏教多しと云えども、絶対平等の救いは、この阿弥陀如来の誓願一つなのだ、誓願一仏乗ということをお話して、それが終わりましたから、「正信偈」が始まるわけです。皆さん、「正信偈」をいつもお勤めに用いておりますので、「正信偈」はそういう意味では、独立した偈文ではありますが、これは、「行巻」ぎょうのまきの最後のお言葉だということをお話して、覚えておいていただきたいと思えます。

つまり、南無阿弥陀仏の救いを、六十行百二十句の漢文の詩で表わされた。それは、どういう構式になっておりますかと云いますと、最初に、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」。南無阿弥陀仏を、この二つの言葉で最初に顕されて、その後は、「依経段」、「依釈段」という。「依経段」というのは、『大無量寿経』によって、この真実の救いを顕された段が「依経段」。その後に、イ



ンドの龍樹菩薩から日本の法然上人に至るまでの七人の高僧方が、それぞれの時代において、この南無阿弥陀仏の救いをどのように受けて、教えを残してくださったかということが「依釈段」。

依経段 大無量寿経 真実経 浄土真宗

依釈段 七祖の解釈

『大無量寿経』の内容を顕された一段を「依経段」と言い、「依釈段」というのは、七祖の解釈です。「かいしゃく」と読まないで、「げしゃく」と読みます。七祖の解釈がどういうことかというのと、インドの龍樹菩薩、天親菩薩、中国で曇鸞、道綽、善導、日本で源信、源空と、この七人の高僧が、阿弥陀如来の本願をどのように受け止め、救われてきたかをそれぞれの著書で表現しておられる。その要点を述べられた。こういう構成になっておるのが「正信偈」です。

最初に、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」。これは、まあ一般には、「帰敬序」と云われていますけれども、そういう簡単な意味ではなくて、南無阿弥陀仏の意義全体を「帰命無量寿如来 南無不可思議光」の二句で表しておられる。「正信偈」は、七字の偈文、つまり、漢文の仏教詩ですから、字数が制限されているわけです。散文であれば、「帰命無量寿如来 南無不可思議光如来」と云わなくてはならないところだが、「如来」という字を入れれば九字になるから、「南無

不可思議光」と、後の二字は省略してあるわけです。これは、南無阿弥陀仏ということですが。「命無量寿如来 南無不可思議光」。命量りなく、光量りなく、人間の思いをはるかに超えた仏を、南無阿弥陀仏と申し上げるのだと。不可思議光というのは、我々の思いをはるかに超えている光明ということですが。これは、ちよつと具体的に申し上げますと、五つの不思議の中の仏法不思議ということですが。

「いつつの不思議をとくなかに仏法不思議にしくぞなき 仏法不思議ということとは 弥陀の弘誓になづけたり」（『高僧和讃』 四九二頁）

とあります。

昨晚、東京湾に台風が上がるとかいう気象情報がありました。鹿児島は台風銀座と云われるのです。東京には、銀座というところが、五十何カ所ある。私が仮の宿としている板橋区の常盤台という所ですが、東武東上線の踏切を越えて商店街にいくと、常盤台銀座と云っています。銀座というのは、つまり、商店が並んで多くの顧客がやってきて賑やかな所、という意味です。ところが、鹿児島は台風銀座。常に台風が来襲する所だと。そういう変な名前を付けられているのです。気象天候の不思議は仏法で云う龍力不思議です。それが不思議の第一です。そういう不思議

議が前に四つあるのだけれども、それを全部説明していると時間がかかりますから、それは省略します。その最後の五番目が、仏法不思議、仏法力不思議です。これは、仏法力不思議とはどういうことをいうかと云えば、救われる筈のないものが、救われるということなのです。救われる筈がないものが、「諸邪業繫さわらねば 弥陀の本弘誓願を 増上縁となづけたり」という『和讃』があります。

「仏法力の不思議には 諸邪業繫さわらねば 弥陀の本弘誓願を 増上縁となづけたり」  
（『高僧和讃』 四九五頁）

いろんな罪をつくっているものが、その罪が障らない救いが実現するというのが、仏法不思議です。不可思議光如来というのを、具体的にそう云ってあるのです。人間の胸に残っておる過去の言動のメモリー、さっきお話ししました、夜中に目が覚めた時にいろんな思いが起こってくるはたらと云いましたでしょ。ああいう人間の妄念妄想が破れていく用きが、少しも減らずに実現する。減衰しない。電波は、遠い所で受けると、減衰した電波しか受けられない。近い所だったら、強い電波がくる。放送局から遠い所では、音も絵も悪くなるということがあるでしょ。それを減衰というのです。電波が減る。ところが、如来の南無阿弥陀仏の用きは、減衰はたらということがないの

です。減らない。どれだけ時間が経っても、どれだけ時代が変わっても、受ける方が、受けとる力が弱くても、そういうことは問題でないのです。つまり、減衰しない不可思議なる用はたらきが、常に自分の上に用はたらいてくださるといふことなんでしょう、不可思議光如来というのは。私は、具体的にそういうことだと思えます。ですから、寝ておろうが、風呂に行っておろうが、入院しておろうが、どういふところでも、お念仏申したら、常に如来の光明が、ありありと自分の上に用はたらかけてくださる。減衰しない。鉄筋コンクリートの家におるから、如来の光明が減ったということとはないのです。どんなところに居っても、ちゃんと南無阿弥陀仏と言葉が用はたらいて、私にこの本願力が、直に私に及んでくださる。そういう世界を、「帰命無量寿如来」の後の、「南無不可思議光」といふ言葉で表されておるのです。その不可思議な光明を唯一の抛り処として、生きる我々の信心のことも、南無阿弥陀仏といふ言葉で表しているのです。その内容が「南無不可思議光」です。

「南無」といふは帰命なり。「帰命」は本願招喚の勅命なり。（『教行信証』 一七七頁）

とありますが、我々がこの光明を唯一の抛り処として生きる。その光明といふのは、名号はたらの用はたらきです。南無阿弥陀仏の、我々の闇を破っていたはたらき用はたらきです。これを、『浄土論註』の言葉で云えば、

「破闇満願」という。闇を破って願を満たす。単なる破闇ではないのです。単に、自分の妄念妄想、悩みが破れるということではなく、願いを満たすというは、真の救いが得られる、得たいという心が満たされる。つまり、具体的に云えば、浄土往生の願が満たされる。つまり、この穢土の幸福だけを追求して、思うようにならん、思うようにならんから思うようにしたい、しょっちゅうそういう繰り返しをしている妄念妄想から離れる事が出来る。

昨日からテレビを見ていたら、首相が今行っている外国で、温家宝首相と会う話になっていた。ところが、突然向こうから断ってきて、同じところに居りながら、話が全然できない状態になったというニュースが入ってきたのです。なぜそういうことをするのか。外務大臣まで出て、ちゃんと話が済んでいた、約束が取り交わされていたのに、突如として取り止めるといってきた。もししたら、また今朝のニュースを聞いたら、それは間違いだった。また後の機会なら、十分くらいなら会うようなことになっていると聞きました。外交問題というのは、そういうことの繰り返しだなあと思っています。思うようにしたいが、思うようにならない、我々個人的な、家庭的な問題とは違って、国を代表する人が、思うようにしたいが、思うようにならない。そういうところで大変苦労しておられる。この世とはそういうところ。思うようにしたいが、思うようにならない。それで思うようにならないから、なおさら思うようにしたいという計らいを巡らすわけです。ところが、いくらやっても完全に思うようになるということはありません。そういう

ところを穢土といえます。

穢土とは、不純粹世界という意味です。穢というのは、汚れている世界というように誤解しますが、今日の言葉で云ったら、不純粹世界。俺が、俺が、という心を基本にして、煩惱生活をしている人間が、共同で作っている世の中ですから、思うようにしようと思うこと自体が、道理に合わないことだけれど、やっぱり我々は、思うようにしたいという心に振り回されておる。そういう世界を、穢土という。穢土というのは、不純粹世界ということですよ。

ところが我々の身体は、不純粹世界におりながら、南無阿弥陀仏という言葉の用きはたらによって、絶対純粹の精神界に生まれることができる。これが浄土真宗です。このところがはっきりしないと、浄土真宗の門徒というのが、形ばかりになってしまふ。身体は穢土におりながらですよ、思うようにしたいが、思うようにならないところにおりながら、南無阿弥陀仏という言葉の純粹な力（本願力）を頂いて、純粹世界に生まれることができる。純粹な精神界に生まれる。これを親鸞聖人は、「無量光明土」と云われる。いつも闇が破れている。本当におかげさまでありがたうございます。この世に人間として生まれてきた訳がわかりましたと感知出来る精神界です。私たちは、人間として生まれてきた訳がわからないままで死んでしまう場合が多いです。親が生んだのだから、仕方がない。親に責任を負わせてしまって、親が生んだのだから、仕方がない。世の中は競争社会だから仕方がない。もう生まれた以上は、何時か死ぬのだから、もうどう

しようもない。そういうところで最後はどういうところに落ち込むかといったら、「運命」というところに落ち込むのです。

真実の救いをいただけないものが、最後に落ちる穴は、運命です。自分は運が悪いと思う。大体、こんな親の子に生まれたのかと。こういう連れ合いを持ったのが、運が悪い。こういう子供しか得られなかったのが、運が悪い。最後は、運命というところに落ち込むのです、人間は。真実の救いはつきりしないと、全て運というのは、誰が何にどういう仕向けをしたのかわからないことでしょう、運というのは。運命の神様がどこかにおって、我々をひっぱるなどと抽象的な話で、運がいいとか、悪いとかいうことは、実際どうということかということとは、本当のことがわからないのです。だから、わからないままで、運がいいとか、悪いとかいうことを云っているのです。そういう運命論から解放されるのです。運命論とは、仏教の言葉で云ったら、外道なのです。外道というのは、仏教以外の思想、信仰ということなのです。

それから、偶然論というのがあります。なんでも偶然だということです。交通事故の例を挙げれば、よくわかるでしょう。自分は規則に従って、一生懸命、順則運転をしておった。にもかかわらず、向こうが無茶なことをして、曲がり角でぶつかってきた。もう一秒ほど私が遅かったなら、こんなことにならなかったのに。相手が偶然ぶつかったのだと、こういうようなことになるのです。偶然論というのも、外道なのです。それで、外道思想というのは他にもたくさんありま

す。いっぱいありますが、一番大きいのは、運命論と偶然論。その運命論、偶然論から解放されるのです。それはどういう形に解放されるかと云ったら、宿業の我が身であるという自覚として解放される。自分が、この苦しみを背負うて生きなければならぬ、過去の結果を今、受けておる。こういうことが安らかに頂ける世界だ。これ、『歎異抄』の第十三章。

「よきところのおこるも、宿善のもよおすゆえなり。悪事のおもわれせらるるも、悪業のはからうゆえなり。」（『歎異抄』『聖典』六三三頁）

これをどういふことかという、現代語で云えば、意志の自由があるようでないということです。我々は、自分の意志で何でもできると思っているでしょう。思うとおりにできるものだと思っているけれども、宿業の我が身ということは、意志の自由があるようでない。完全に意志の自由があるとは云えない。それを別の言葉で云ったら、

「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」（『歎異抄』『聖典』六三四頁）

しかるべき縁があつたら、どんなことでもする我が身であるということに気がつかせてもら



う。これが、仏法の力です。仏法抜きにして、そういうことを云つたら、非常に自虐的というか、自分で自分を虐待する思想になるわけです。宿業ということを、仏教の教えを抜きにして、業だということ云つたら、運命論になってしまう。自分を虐待してしまう。ところが、親鸞聖人はそう云われない。「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」ということを、もつと具体的に云つたら、職業というものもそうなのだ。自分が漁業の家に生まれたら、そのことによつて、魚を獲ることを職業にしなくてはならなくなる場合もあるし、農業であつても、虫を殺すということをしなくてはならない。

ある女性の聞法者で、養蚕家がいたわけです。養蚕家というのは、蚕を飼つて、繭にして、売る仕事です。この場合、気候の変動で蚕を生長させることができないう場合があるのです。急に寒さが来て、桑の葉が枯れてしまうことがある。そうすると、今まで養つてきた蚕を殺さなくてはならない。それで、その人は、お念仏しながら蚕を埋めますと。もう本当に悲しいことだと。また罪の深いことだと云われる。

ところが、その大型なのが、宮崎県の口蹄疫ですよ。二万九千頭の牛や豚を、殺処分しなくてはならない。そういうことです。これは、「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」ということ。このことを具体的に表している事件だと、私は思っております。

そういう職業の問題を中心に、親鸞聖人は、我々在家のものが、宿業の我が身ということ

に目を覚まさせていたかどうかということが、我々の救いの根本になっている。その自覚において、初めて運命論とか、偶然論を超えることができるということが、『歎異抄』の第十三章に説かれていると私は思います。つまり、外道から解放されるのです。

ところが、仏法でなく、宿作外道というのがあるのです。宿作外道というのは、救いがない運命論と云っても差し支えないです。過去の行為の結果を今、受け取るのだと。これは仕方ないのだというようなところで、自分を落ち着かせようとする。そういうのを宿作外道という。宿作外道というのは、この世で修行して、過去の自分の運命を乗り越えられるのだというようなことをいうわけなのだけど、事実として、どうなることが救いなのか、はっきりしないわけです。この思想と宿業の自覚とを間違えるのです。その問題が今、同和の問題でいろいろ問題を起こしているでしょう。宗門も、そういう間違った理解をして差別して来た。宿業とは、宿命論とか、宿作外道ではなくて、自分のことなのです。宿業の我が身とは、人のことを云うのではない。自分がこの果を受けるのは、自分の過去の業因の果を受けているのだということを自覚させてもらう。それは機の深信です。

「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」と信ず。（『教行信証』二二五頁）

深く信ずる。この深信が、得られそうで、なかなか得られない。我々、自分を罪悪生死の凡夫と受け止めることが嫌なのです。そういうこと。自分が善人だと思いたいのです。自分の意志の自由を行使して、どんどん幸福な方向に自分を持っていく能力が自分はあるのだという具合に、自分を評価したいのです。ところが、現実はそうでない。その矛盾が超えられるのが、念仏道の「機の深信」です。「機の深信」というのはつまり、長い間の過去の自分の行いの結果を、今、私が受けていかなくはならないが、それを安らかに受けられる道が開けてくる。これが「宿業の我が身の自覚」です。

私は、運動神経が鈍い。小さい時から。小学校から中学に至るまで、一番嫌な授業が体操の時間。跳び箱が飛べないのです。先生が、「他のものが飛べるのに、お前はなぜ、お尻を箱の上に残すのか。」と叱られるわけです。どれだけ飛んでも、尻が箱の上に残る。それから鉄棒です。尻上がりとか、蹴上がりとかいうようなことができないのです。それで、体操の時間に雨が降れば喜んだ。今日は体操をしなくてもいいと、体育の先生の授業でいろんなことを聞いておれば、それで済むのだと思って、私は喜んだことがあります。自分はなぜ、運動神経の鈍い者に生まれたのかなあと思っていましたら、その私が騎兵隊にとられた。人が上手に馬に乗れるのに、なかなか乗れないのです。落ちると、「誰が降りろといったか。」と叱られるのです。降りたのではなく、落ちたのです。そういうことがあります。運動神経が鈍いということが付きまっています。

のです、私に。最近は何歳をとったから、人から運動神経が鈍いと云われなくて済むのです。「しようがないなあ、八十七歳にもなったのだから。」と許してもらえるようになった。そういうことがありまして、なかなか皆、オリンピッククに出てくる体操の選手のようにはいかないのです。それは、身体の問題だけでなく、頭の問題もそうです。いろんなことで、人のようになれないということ、私も悩み苦しんできて、それを一言で云えば、劣等感です。どうしたらこの劣等感から解放されるかということが、私の大きな課題だった。

「正信偈」には、

邪見憍慢悪衆生 信樂受持甚以難 難中之難無過斯

邪見憍慢の悪衆生、信樂受持すること、はなはだもって難し。

難の中の難、これに過ぎたるはなし。『教行信証』二〇五頁)

とあるが、本当にあの言葉のとおりです。自分の力で、自分の業を何とかしようという邪見の人間だから、他人のできることをできないと結局、劣等感が起こるのです。劣等感ですまないで、被害者意識が出てくる。被害者意識というのがどうかというと、こんな運動神経の鈍い子供に生んだのは、母親が悪いのだというようになる。劣等感と被害者意識は、なかなか抜けられ

ないので。救いというのを具体的に云ったら、劣等感と被害者意識からも解放される。それが、機の深信です。宿業の我が身ということに気が付かせていただいて、できないことはできませんと、すみませんというより他ないのです。ある程度、中学では筆記試験は、そんなに悪くなかったけれど、体操と音楽で、ぐっと落ちる。体操は五十何点、音楽も音符がうまく読めない、変口長調とか、二長調とか、あれ何のことかさっぱりわからない。歌も下手だし、楽器も弾けない。これで音楽の点数が。それで、成績は平均するところがたつと落ちた。それで、どんなに勉強しても一番とか、一番にはなれなかった。それで劣等感が付きまといてきているのです。そういう私が、曾我先生の教えに遇って、初めて劣等感から解放された。

「老少善悪のひとをえらばれず。ただ信心を要とすとしるべし。」（『歎異抄』『聖典』六一六頁）

信心を要とす、ということの、その信心の基本は何かというと、機の深信だということを曾我先生から教えられた。機の深信は、基礎建築だ。法の深信は、上層建築だ。基礎建築がしっかりしていないと、上層建築が出来ないし、また、出来ても、ぐらぐらのものになってしまう。だから、機の深信の徹底ということが、大事だということを教えられて、そこで、『歎異抄』の第一章の「老少善悪のひとをえらばれず。」ということと、それから、第二章の「いずれの行もおよびがたき

身なれば、地獄は一定すみかぞかし。」と、「正信偈」の「邪見憍慢の悪衆生、信樂受持すること、はなはだもって難し。難の中の難、これに過ぎたるはなし。」と云う御言葉が、自分のこととして響いて来ました。

自分の力では極めて困難なことが、南無阿弥陀仏の用はたらきによって、できる。劣等感や、被害者意識に悩み続ける必要のない世界を会得させて頂いた。そのところが有り難いと私は思っております。

「正信偈」の話を、もつとしなければならぬのですが、もう三時過ぎました。それで、「正信偈」を一言で申しましたら、それは『正信念仏偈』です。正しく信ずる。それはどうということか。『正信偈大意』という書物があります。蓮如上人が、金森の道西の要望に従って、「易しく『正信偈』の意味を説いてください。」という要望に従って、書かれたものが、『正信偈大意』なのです。

『聖典』を見てください。『正信偈大意』。そのあとがきを見れば、蓮如上人も再々、お断りになった。とても自分ではできませんといって、お断りになったけれども、金森の道西が、そんなこと云わずに、どうかお書きくださいと云って、何遍かお願いしたので、『正信偈大意』をお書きになったのだと、自分で云っておられます、蓮如上人が。それを開けてみてください。『聖典』七五九頁の奥書。

奥書、

右この『正信偈大意』<sup>しょうしんげ</sup>は、金森の道西、自身才学りようけんにそなえんがために、蓮々そののぞみこれありといえども、予いささかその料簡りようけんなき間、かたく斟酌しんしゃくをくわうるところしきりに所望のむねさがたきによりて、文言もんごんのいやしきをかえりみず、また義理の次第をもいわず、ただ願主の命にまかせて、ことばをやわらげ、これをしるしあたう。その所望あるあいだ、かくのごとくこれをしるすところなり。あえて外見げけんあるべからざるものなり。あなかしこ、あなかしこ。

于時長祿四歳六月日

(『正信偈大意』『聖典』七五九頁)

これを読んだら、やっぱり人様ひとさまにお願いする時は、いっぺん断られても、何遍もお願いしなくてはいけない。そういうこともわかってきたし、それだけお願いをした願旨、つまり、金森の道西は、本当に大事なことを教えてもらいたいという気が強かったというわけです。それで蓮如上人は、『正信偈大意』をお書きになった。その最初に、正信とはどうということかと書いてある。それは、『聖典』七四七頁です。

問うていわく、『正信偈』というは、これはいずれの義ぞや。

こたえていわく、「正」というのは、傍に對し、邪に對し、雜に對することばなり。「信」というのは、疑に對し、また行に對することばなり。

（『正信偈大意』『聖典』七四七頁）

これに、「傍」、「邪」という言葉があります。もうこれだけ話してやめます。

「傍」というのは、傍らという、つまり、南無妙法蓮華經と称えたら、功德があるだろう、南無大師遍照金剛と称えても、功德があるだろう。新興宗教も、何か功德があるだろう。念仏も、何か功德があるに違いないといって、たくさんある中で、念仏を傍らにして称えるというのは、正信ではないのだ。傍信という。そんなのではない。「ただ念仏して 弥陀にたすけられまいらすべし。」、これが、正信だと。

「邪」というのは、人間のよこしまな、道理に合わない心で、念仏を手段化する。つまり、自分の幸福を追求する為の祈祷の呪文にする。そういう称え方を、邪という。よこしまというが、「邪見憍慢惡衆生」の邪です。

「雜」というのは、雜ぜるということです。雑炊、お米のご飯だけでなく、野菜を入れたり、いろんなものを雜けて美味しくする。雑炊、雜、炊と書いて、「ぞうすい」と読む。雜というは、仏教で云ったら、二つ意味があるのです。雜ぜるという意味と、通ずるという意味と、両方あるのです。傍、邪道の、雜は雜ぜる。いろんなものと雜けて、念仏も称えないわけではないが、他



の言葉も称えるし、『般若心経』なんかも功德ありそうなど云って、書写したり、最後の「ぎやあていぎやあてい、はらそぎやあてい。」の言葉を大事にしたりして、いろんなものを雑ぜくつて、皆仏教だといって、それでいい気になっておる。いい気になっておるといのは、ちよつと云い過ぎかもしれないけれど、それで自分に信心があるように思っておる。そういうのを雑行という。それで、それに対して、正信という。正しく本願念仏一つで、私がたすかるのだと。浄土をはつきりさせてもらう。それが、『歎異抄』の第二章です。自分が念仏を称えたから、浄土に生まれるとか、地獄に落ちるとか、そういうことは自分の計らいで決めるではありません。

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。（『歎異抄』『聖典』六二七頁）

それが、正信なのです。これ一つだと、そこに徹底しているかどうか、ということが、「正信偈」を読ませていただいて、最初の題号によって与えられた課題なのです。

また、このことは例会で、『和讃』のお話をしておりますから、それがご縁で、「正信偈」の話もできるだろうと思いますが、今日はこれで終わらせていただきます。

要は、浄土真宗というのは、宗派の名前だと思っっている人が多いけれども、それは浄土の真宗、

法然上人の開いていただいた浄土の真の旨を真宗ということをして、親鸞聖人が明らかにしてくださった。その教えの根本は、『大無量寿経』本願の御みのりである、これが浄土真宗ということをして、今日はお話し申し上げたわけでございます。これで終わります。

※語註 二十七頁本文中の「六種類の名号」について、親鸞聖人の真筆といわれる名号は八種類現存していますが、『親鸞聖人真蹟集成』（法蔵館発行）の巻末の藤島達朗先生の解説によれば、次の六種類が完成した名号本尊であると述べられています。一．「帰命尽十方無礙光如来（黄地十字名号）」（専修寺蔵）二．「南無不可思議光仏」（専修寺蔵）三．「帰命尽十方無礙光如来（紺地十字名号）」（専修寺蔵）四．「南無阿弥陀仏」（西本願寺蔵）五．「帰命尽十方無礙光如来（妙源寺蔵）」六．「帰命尽十方無礙光如来」（専修寺蔵）。以上が本文中の六種類の名号の内容であります。

## 〈座談〉

(司会) 質疑応答を始めます前に、住職の方から、ちょっとお話があるそうでございますので、宜しくお願いいたします。

(住職) 先生との座談、質疑応答という時間に入っていくわけですが、ちょっと余計なことを申したいと思えます。まず第一に、時間が過ぎていることですが、曾我先生は、全くのつてくると、時間が超越されてくるということを聞いています。それから、この間、東京教区の秋安居に行きましたら、本多先生も、ある面、三十分平気で過ぎていくといったら、本多先生は、今まで最長三時間半休みなしで、全然止まらないという話があって、なるほどなあ、三時の終了なのに、三時半近くまで先生が話されたというのは、やっと先生も曾我先生に近くなってきたなあ、と余計なことを申すわけですが、失礼しました。

それで、先程、先生が座談ということ云われた中で、余計なことを申し上げたいのです。それはなぜかという、聞法会の後も、質疑応答ということがあったのですが、その時、先生が座談形式にしたいとおっしゃったのですね。座談形式というのは、円陣といいましょうか、車座といいましょうか、そういうイメージで云われたので、机やなんか全部なっていると、時間もないところに、そういう会場づくりなど、移動とかちよつ

と困難なので、そういうのは、ちょっと難しいというお話をしたのです。そういうことだったならば、そういう計画の中に、スタッフを予定しながら、会場をセッティングすることは出来ますと。こういうふうなお話をしたことがありまして、なるほどなあ、そういうことが何回かありました。他の人からも。それにこれ、分かったのです。本願寺が、黒板を使うのは、まあ云ってみれば、近年というか、新しいことなのです。歴史上は、私が聞くところによると、黒板でこういう法話をされるのは、最初にやった人は、広島に住岡夜晃先生と聞いております。板書して。そういうものは、仏法の法話ではないという批判の中で、それをやり続けたと。それは、本願寺の浄土真宗ではない、一つの宗教団体なのですが、それが、今度、本願寺で、当然のごとく黒板を設けて話し、こういう椅子に座って、先生が話し、やっている。皆が、教室のように、椅子に座り、真向かってやってそれが会座とか、座談とか、法話会とか、聞法会とか、当たり前になっておるのですね。これ、おかしいですよ。要するにこれは、学校スタイル、スクーリングというスタイルなのです。本願寺自身にないのです。ところが、これが定番になってしまつて、じゃあ、座談というのは何だというと、車座、机を円陣に組まなくてはならないのに、せまいところに机がぎっしりになって、また机を運び出さなければならぬとか、最近ままあります。

だから、座談といっただけで、そういう問題がおきるわけです。当然、なかで質疑応答がきたけれども、座談にしましょう、といった時の先生のイメージは、車座なのです。それをやるには、会場設定から、移動から、全部立ってもらって、荷物は運んでとか、やんなくてはできない。簡単にできない。どんでん返しはできない。こういうものがあります。それが一つあって、先生が座談というのが、車座ということがわかりました。だけど、この間云ったのが初めてなのだけど、また今日も座談という中に、質疑応答という中にも、ちよつと、こういうスクーリングというか、学校形式の質疑応答になるわけです。櫟先生の座談の車座は、一問一答ではないとおっしゃったのですね。要するに、誰かが質問したら、私はこう思います。私はこう思いますと云って、なんか最後、先生が黙っているか、アドバイスするかという形をイメージしておられると分かったのです。ところが、伝統的で、法然上人は、御同朋に投げ出せ、自分はこういう信心を頂いているとか、わからないとか、こういう有り難さを頂いたとか、まだ悲しいとか、苦しいとか、死にたいとか、なんでもいいから、御同朋に投げ出せ。そうすると、皆が話している中に、本当にわかってくるとか、信心がいたただけるようになるというのですね。それが、蓮如上人では、御同朋、御同行の前に投げ出せというような。その蓮如上人の平座という中で、こういう椅子に座って、お前たち、教えるぞという、スクーリングという

形でないということ、平座といたり、ある面は講とあって、ある面は車座のようなイメージがあるわけです。伝統的な座談とは、まあミスメイクというか、イメージの違いがあります。先生が、一問一答ではないということで、座談という意味は、一人の人が云つたら、私はこう思う、反論でも、賛論でも、アドバイスでも、助言でもいい、と思うのです。そういう形で、発展するのを先生が望んでいるということが分かったけれど、これやると時間がものすごくかかると、かかったって、それで納得して帰るのだったら、報恩講はすごい意味があると思うのだが、やっぱり時間に限界があるし、住職がこんなべらべらと話すから時間を食うと、こういう問題がありまして、まあ、これスクーリングなのです。これは、座談と思わない。だけれども、座談であるという。一問一答で先生が答える、それを望まないのに、そんな形になっているし、先生もしています。こういうミスメイクは、実にあるので、余計な蛇足ですが、申し上げました。

(司会) このスクーリングの形体、誰も動かないところで、一つ始めたいと思います。先生、ちょっと一言アドバイスを頂いて、始めたいと思います。

(先生) はい、どうぞ。ご自由にお話し下さい。

(司会) 遅くなりましたが、質疑応答をこれから少し始めたいと思います。日頃考えておられることでも結構ですし、今日のご講話、前年のご講話の中から、お考えのものがございま

(淡海)

したら、どうぞ、挙手されてお話頂きたいと思います。どなたか、ございますでしょうか。先生、いつもありがとうございます。今日先生が、とても自分の心を割って、いろいろなお話をして下さいまして、先生も怒られることがあるのだということが、とても安心感を頂きました。実は念仏という問題で、私にとって、念仏とはなんでしょうかというのが、とても大事なことだと、いつも頂いております。私がどういう時に、念仏が出てくるかというのが、やはり自分に問うていくことが多いのです。その時に、なかなか念仏が出てこないというのが、正直なのですけれど、結構、念仏を消しゴムとして使っていることがあるのですね。でも、やっぱり少し心が落ち着いてくると、「あ、そうなのだ。」というのがわかっていて、また、そこを私がここで説明をしてしまうと、その感覚がちよつとずれてしまうので、なんとも云い難たいのですが、そういうところに、これって私がしている念仏ではなくって、頂いている念仏という感じが、最近わかって、とても嬉しく思っております。唯念仏、としきりにいろいろなところで、聞いたり、書かれたりしているのですけれど、唯、という一言が、とても難しいものであって、どうしても私にとつて、浄土真宗の教えを考えていく時の、機の深信ということを深く抑えているのですね。なぜか、運命論、先ほど、先生が運命論とおっしゃられておりましたが、そういうところに全然引つかからないのですね。

もつと云えば、私の主人は、事故で死にました。ある意味で、殺されたようなものだと、周りが云うような事故でしたので、それを思えば、それは運命だったとか、その悲しみはなんだということ、いつまでも云っていても、そこで留まったのですが、すごく有り難いことに、この浄土真宗の教えに出遇わせていただいて、そういうものではなくて、運命ではなく、縁のもよおせばという言葉の所に、落ち着きました。『歎異抄』の言葉で、仏教の教えが、因縁の中での動きであるということと、縁のもよおせば、何をすることもわからない。事故をした相手の問題だけでなく、私の中にも、そういうものを持つているということが、すごく感じられております。全く恨むべき問題ではなく、こういうことがありうべきだということが、自分の中で納得がいつているので、これが、私にとつての真宗の教えに出遇わせていただいた、一つの喜びであり、お念仏を申して、宗教を信じると急に幸せになるとか、そういうような、目に見えるものをすぐ想像していたのですが、そうではなくて、教えを頂くということが、自分を気づかせていただいているという、そこに自分を持つていけることに喜びです。

今日は報恩講ですので、そういう意味で、お念仏に出遇えて、有り難いということが、今の心境でございます。いつも、お世話になっておりまして、有り難うございます。

(先生) 「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫」、善導大師のお言葉ですね。『歎異抄』後序』に、ちよっ



と変えて引かれておりますね。

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐そうらいしことを、いままた案ずるに、善導の、「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」（散善義）という金言に、すこしもたがわせおわしまさず。（『歎異抄』『聖典』六四〇頁）と書いてあります。

『歎異抄』『後序』に。それは、善導大師の言葉と同じだと云えば、云えないこともないけれども、やはり唯円大徳が、親鸞聖人のこのお言葉を聞いて、ひらめいたことなのです。ひらめいたと云うか、自分に直観した言葉なのです。親鸞聖人がおっしゃった言葉は、理屈を云えば、機の深信だけではありません。どちらかと云ったら、法の深信を云っている。

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」とありますから、どちらかと云ったら、法の深信の言葉のように我々が言

葉だけ読めばそう思う。そういう理解が、正当な理解のように思ってしまう。

ところが唯円大徳は、それは自分のことを云われておるのだと。「自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」という金言に、すこしもたがわせおわしませず。自身に引き受けたわけです。親鸞聖人のお言葉は、一切衆生という大きな広い意味で、すべての人が、念仏一つで救われる道をいうておられる本願を、「親鸞一人がためなり」と主体的に受けられたわけです。理屈をいえば、一切衆生の救いなのだけれど、それを「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。」と、自分一人に受け止められたわけです。その所ですね。「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫」という機の深信の上に、初めて「五劫思惟の願」が、私の上に用いてく<sup>はたら</sup>ださる「身としれ」という金言に、すこしもたがわせおわしませず。」、あそこの所を、今、あなたのおっしゃるお言葉で、私は感じさせていただきました。以上です。

(淡海)

先生、有り難うございました。どうしても、如来と私という関係において、自分が小さい者なのに、大きな如来を自分の中に取り込もうとしているところがすごくあって、やっぱりそういうところが、聞き続けていかなくはならない自分があるということを感じさせていただいております。

(先生) 取り込むというよりも、私は、曾我先生のお言葉で申し上げますと、回向ということは、感応ということだと云われた。回向とは、向こうからこちらに与えられる。それを、自分が受け取るという具合に、普通は観念的に考えてしまうけれども、それは響き合いということなのだ。如来の本願が、一切衆生を呼び覚ましておられる本願を、私一人がためなりと頂く響き合い、感応の世界というものが、これが、回向というものだ。分かったというのではなく、感じ合っていくという、それを大事にしたいと思います。有り難うございます。

(司会) 有り難うございました。他にございますか。

(田中) 先生には何年振りかでお会いするようで、本当にご無沙汰して申し訳ございません。久しぶりに、先生のお話を聞かせて頂いて、非常に感銘を受けました。ありがとうございます。今、淡海さんのお話の中に、偶然と運命論から解放されるお話がございました。今、淡海さんのお話の中にありましたけれど、事故に遭う、私は幸いに事故には遭っていませんけれど、秋葉原の殺人事件がありました。ああいう事件に遭うということも、何かの縁といえますか、自分がそこにいなかったからたすかったという、そういう思いがあるのですけれど、そういう事故に遭った、遭うということは、やっぱり、偶然ではないということなのでしょう。

(先生)

それは、やはり常識的に考えれば、偶然であり、絶対にあつてはならないことをする人間が、そこに現れた時に、丁度そこにいたのだというような、偶然的な考え方になります。けれども、運命論とか、偶然論とかのところでは、亡くなられた人のご遺族とか、お知り合いとか、親しい人とかは、単なる運命論とか、偶然論ではたすかららない。どうしたら、亡くなられた人の心を無にしないような生き方が、これからできるのかという問題が一つと、そういう事件を起こした人を、恨み倒し、極刑に処するということだけが、報復なのか。報復という考え方から、どうしたら超えられるか。今、裁判員の問題で、こういうことが云われておりますが、そういう問題が解けずに残るのです。これは、国家の法律とか、刑事問題とかではなくして、我々自身の一人一人の自覚の問題となるわけです。

曾我先生の『救済と自証』という書物ができております。救済ということは、これは、単に救う仏と、救われる我々とがあつて、二元的に、仏が我々を救い救われるのではなくて、如来の本願の用はたらきが、私に響いて、そして、私の苦悩から解放されるということでもあります。そのもう一つ具体的なことが、二種の回向ということ。還相回向ということがございまして、そういう形をもって、自分の愚かさに気付かせていただき、自分の罪の深さに気がつかせていただいて、自分が仏者にならせていただこうという、大きな

用きをしていただいているのだと受けとめられる、そういう、超越的な受け止め方ができる。こういうことでしょう。

私は、いろんな事件にも遭いましたし、私の経験を一つ申し上げますと、私は、軍隊で戦後一九四五年の九月に復員してきたのです。解放されて。その前に、殺されかけたことがある。殺されかけたというのは、連隊本部の事務所におったのです、私は。その時の階級は、陸軍伍長です。その連隊本部の主任というのは、准士官です。曹長の一つ上。少尉の一つ下。その准士官が、権限を持っていたのです。日曜になると、その准士官に頼んで、外出させてもらおう。外出証をもらって外出するのですけれども、私はあの時、頼んだのですが、やれないと云って断られた。断られたので、その人が帰ってから、違う士官に「外出したいのですが、外出証をいただけませんか。」と云ったら、「OKです。」と外出証を書いてくれた。それで私は、京都の町に行って、劇場に入ったのです。そうしたら、その准尉が劇場におった。びっくりして、敬礼だけして、黙って帰った。そういうことがあった。その為にその准尉が、私を非常に恨んで、自分に頭を下げてこないで、別の人に外出証をもらった、生意気だというわけです。それで、戦後、「お前殺してやるぞ。」と云って、一杯飲んでいて、やけくそになっておるのですから、「殺してやるぞ。」と云って、真剣、本当の剣です。それを持って、私を追ってきた。それで、

私は殺されてたまるものかと、こんな男に殺されてたまるものかという心で、逃げた。どうしたら殺されずに済むかと思つて考えた。二階にバーツと上がった。片方は酔っぱらっているが、私はひとつもアルコールを飲んでいない。だから、酔っぱらっている人間から殺されないようにするには、彼が自分で痛い目にあわせるしかないと思つて、二階の下士官室に入つて、長い椅子があるのですよ。それを廊下にパツと出した。そして、下士官室のドアを内からグーツと抑えて、開かないようにしたら、酔っぱらつた准尉が、その腰掛に当つて、バターツとひっくり返つて、痛い目をして歸つて行つた。ほーつとした。殺されずに済んだ。戦争が済んでから、馬鹿げた酔っ払いに殺されてたまるものかと思つて、殺されずに済んで、ほつとしたことがあるのです。

そういうことも経験しまして、人間、「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」という、加害者だけではないのです。被害者の立場に立つておるものも、ろくなことしないのです。自分中心のことしか考えない、そういう我が身というものに、その事件に出くわしたことによつて、私は感じさせてもらったのです。

それで、やつぱり、非道徳的な一番酷いのは、人を殺すということです。しかし、殺されかけたということにおいて、また自覚を深めさせていただくということも、ままあるということ、私は感じております。第三者の立場で、事件をどう解釈するということ

ではなくて、私自身が、自分のこととして、どうそれを受け止めるかということをも思わせてもらっております。以上であります。

(田中) こういう教えに遇わないと、本当にすぐわれないということですね。

(先生) そうですね。その通りでございます。

(田中) 有り難うございました。

(岡田) 先生、どうも有り難うございました。私は、先程の先生の、親鸞一人がためなり、親鸞聖人が教えを自分の為だとおっしゃっていますけれど、それは、私はこの、ここに出遇うことが、真実の、この宗教というよりも、私には真理、道理です。これが、私の為に教えてくださった。そういう風に受け止めております。

(先生) それは単に、私個人の為にではなくして、一切衆生の為に説かれたものを、自分自身が、岡田一人が為なり、と受け止めるということですか。私一人の為なり。ここに、真の主体性というものが、あるのではないですか。その客観的な真実が大事だというのが、常識です。ところが、真宗の教えを聞いておると、真の主體的自覚が大事であると、そういうことが大事であると思わせてもらっております。客観的なことを軽視するわけではございませんけれども、我々の考えている主観客観を超えたところで、主体的に自分自身の上に頂く、これが感応道交ということであります。また、回向だということを、私は

思わせていただいております。以上です。

(重共)

今まで櫟先生のお話を聞き始めてから、十年は経っていると思うのですが、今までは、機の深信とか、信心とか、難しいことばかり考えておりました。それで、柳川さんから、回心コンプレックスだとか云われたりしていたのですが、最近、歎異抄の第二章の「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」ということが、ちよつとわかってきたかなあと思います。と云いますのは、一ヶ月程前に、母親が病気になりまして、病院に行っていて、その間に、車を運転していて、いろんなことが頭の中をよぎって、このまま治らなかつたらどうしようかなと思っていると、すごく孤独になって、不安、いろんなものが縋い交ぜになった気持ちになったのですね。

その時に、櫟先生に云われていた、どんな心の時でも念仏せよと、それを思い出しまして、念仏、南無阿弥陀仏と声を出して云いました。それが、自分の心に響いてきて、スーッと胸の中に入ってきてまして、嫌な気持ちがあるのですけれども、自分に影響しなくなつたのですね。それが初めてだったので、今日も先生が、何回も何回も云われた、南無阿弥陀仏という言葉の用はたらきが、自分に感応するという・・・、

(先生)

闇を破って願いを満たす。破闇満願。

(重共)

はい、そのことかなと思いました。その時、僕の念仏が違っていたのは、そういう状況



にあったということ、ただ念仏すべし、今まで念仏について、色々何か難しく考えすぎていた。その時は何とかな、全く手を加えないで、ただ南無阿弥陀仏と称えただけなのですね。そうすると、スーッと入ってきたので、これがただ念仏のかなあと、いう風に思いました。

それから、そういうことがあって、今回、先生がみえて、真宗会館、北川宅でお話を聞きました、全く今までと伝わり方が、全く違ってきたのです。今まで何とかな、自分なりにわかったつもりでいたのですが、わかっていなかったのだなあと、そう思いました。

(先生)

手を加えないと、今ありましたが、仏法の言葉で云ったら、計らわれないということです。自分が善い心で称えたらたすかるのだ、悪い心で称えたらだめなのだというような、善悪の計らいが必要ないということがわかる。ですから、どんな心が起こっても、それがきっかけで、南無阿弥陀仏と称えられる。そのことによつて、自分の妄念妄想が翻ひるがえつて、浄土を願うという願生心に目覚める。願生心に目覚めるということは、この穢土の幸福、この現実の人間世界を、あくまで追求するというような心から解放されていく。それは、金もなければ、健康もなければ、暮らせないから、物欲に全く迷わされないと、いうことはありませんけれども、それは、自分の煩惱のなせるわざだということに、気

がつかせていただく。そこで物欲に迷わされること少ないという生活が、清沢先生がおつしやられたように、できるようになるわけでございます。そのところが、やはり何といたしますか、往生と成仏の問題なのですが、昨日もちよつと北川さんのところでお話ししました。

往生ということは、我々の不純粋な世界の中で、自分の心が純粋な世界に入らせていただくというのが往生。成仏というのは、釈尊と同じになるということですから、そういうことは、この身体がある間は出来ない。できないけれども、究極は成仏できる身にさせていただいたということを深く感ずることが出来る。そういうことでございます。死を畏れるという心は、煩惱です。ところが、死を畏れる心があつても、南無阿弥陀仏の回向によつて、最後は我々は成仏できるのだということに、はつきりとした決定ができる。人が何と云つても、そうなのだということに頷けるようになる。こういうことでしよう。それが、「往生は、心にあり、成仏は身にあり。」という、曾我先生の言葉は、そういう意味でございます。それが、一生継続していくわけです。信心が得られた時に、直ぐ死んでしまえば、それは、往生即成仏ということが云えるかもしれませんが、信心がはつきりしても、身体の命が続いていく状態では、往生は心にあり、成仏は身にあり、とこういうことであります。

ですから、この命はどこまで続いていくか、誰もわからないのです。だが、そんなことわからなくてもいいのです。終わる時には、終わるのです。本当にそうですよ。心配しても、終わる時には終わるし、心配しなくても、終わらない時には終わらない、我々の寿命の問題はわからないのです。ただ、生まれたものは、皆死ななければならぬということだけは、事実なのです。

ところが、何時、自分に死がやってきても、それは芥こみになるというのではなくて、成仏できる。成仏、仏と同じさどりの世界に到達できるということなのだということを信じて生きられる。だから、それは死ぬ時の問題ではなくて、生きていく問題なのです。そういうことでございます。臨終待つことなし、来迎たのむことなし。昔の言葉で云ったら、そういうことです。

(淡海) 度々、すみません。今、先生が、浄土というところに、純粹という言葉を出されましたが、その純粹という言葉なのですが、それは、私がこのままで善いという、そういう計らいの・・・、

(先生) 善いとか、悪いではなくてですね・・・、

(淡海) 何ていうのかな、純粹という言葉が・・・、

(先生) あえて云うならば、清浄とは、純粹と云えます。浄土は清浄な国土と云えます。

清浄ということが、純粹という言葉に変えられる、あえて云うならばですね。それは、浄化されるという、浄化の用はたらきを、いつも頂いて生きていく。自分の不純粹なものが、浄化される世界をいつもいただいで、生きていくということでもあります。

(淡海) そこには、南無阿弥陀仏が用はたらいているという、そういう意味でございますね。  
(先生) そういう意味でございます。

(淡海) 納得いたしました。

(住職) 柳川さんに一つ。お礼を云わなくては。お礼も云わないで帰るの。

(柳川) お陰様で、本当に先生の言葉をお借りしませば、私も救済されつつあるを感じるというところに、ならせていただいたことを本当に感謝しております。お陰様です。

(先生) それは親鸞聖人のお書きになった、『教行信証』だけではちよつとわかりにくい点があるわけです。それは、『歎異抄』を通して、清沢満之先生が、お示しになったことにおいて、親鸞聖人の難しい『教行信証』の難しいお言葉に触れることができる。曾我先生が、私の善知識として用はたらいてくださった。それは、自分の救済の事実を、言葉として述べられるのであって、単なる教学の研究者ということではない。そういう方々に、私はお陰様で触れさせていただいて、今日の私の生き方が定まったのだと思っております。どうか貴方もそういうことで、先徳のお言葉によって、いよいよ深い信心を、はっきり明瞭に

生きていつて頂きたいと願っております。以上です。

(江部)

今日は長い間、長時間伺いまして、大変有り難うございました。まあ、どこがありましたかったのか、わかったのか云ってみると云われると、ちょっと心もとなく思っておるのですけど。というのは、私は、先生と初めてお会いしてから、まだ大した日時が経っておりません。一番最初は、先生からのお話で伺ったのは、確か『和讃』の話からだった。大変、私、感激しまして、身につまされることもありましたが。もともと少し、『和讃』についての予備的な、どういうものかぐらいの解説は読んでいたのですが、大変難しく、ちょっと見ただけではわからなかったのです。それが、『和讃』といえば、皆さんご存知の通りでしょうけれども、本当の生の姿というか、真髄とは申しかねますけれども、親鸞様の一番の本当の姿が、そこにありありとあらわれているものだという風に、お話を聞いているうちに、まあ、なんだかのことに触れて、私はいつもこの席を座らせてもらっているのですけど涙が出てきました。本当に、先生の本当のお言葉、心の響きといいますか、さつき、感応といいますけれど、伝わりましたね。論理的だとか、理論的なそういうお話ではなくて、実際はそういうものが本当は根底になれば、どんなきれいな、あるいは難しいお話でも相手があつてこそその話です。言葉とはさつき、大事にしろと。言葉から生まれたのだとおっしゃいましたけれど、そういう言葉を、本当

の言葉というのは、そんな簡単なものではない。その中に何かあるかという本質的なことを考えた場合、やはりね、これは仏教、言葉の力というのは、何かそこに伝えたい。今世の中、親鸞ブームの相当の波があると思うのです。七五〇年も連綿として、全国の教団の中でも、これだけの大勢力となつてあるのだけれども、これの本当の力というのが、どこから生まれるのだろうか。ただの、なんかの力でもつて、引っ張ったり、押したり、集めたりする、そういう力ではない。なんかあるのだろうかというのが、住職さんのお話を聞いたり、あるいは先生のお話を聞いて、なんか読んだりしているうちに、そこに、ちよつと疑問が、疑問というよりは不思議な力だな。この浄土真宗という教えはですね、教えの根源は何から来ているのだろうか。私は、ずっとここにきている帰りに、でも、何か考えていた、心のなんか、なんていうか、空いた隙間に、必ず入ってくる問題なのです。なんで、宗教はこんなに力があるのだろうか。こういうことが、私のずーつとこれから続く問題となつていっているような気がする。これは、一つにいうと、何がこんなに長い、時間的には長い、しかし、何がそれを求めているのか、こんなに力のあるものが、どこから湧いて出てきたのだということが、私のずーつと死ぬまでの私の課題なのです。これは、もう先生が、もう誰しも時間的な生きる長さが決まっていますよ。もう十年、二十年、生きられたとしても、その間に、何とかして遣り込めるとか、困らせる

とかいうのではなくて、先生にこれだと私を納得させるようなお答えができるまで、私も死ねないし、先生も死なないように、ひとつお願いしたいと思います。ただそれだけでございます。簡単に、私にわかるような二言、三言をお願いしたいと思います。

(住職) 一問一答で、「南無阿弥陀仏だ。」で、それだけで、おしまいです。

(先生) それは、ちょっと具体的に、そう簡単にはいきなりですねえ。それは、私が読んだ『浄土論』の中に、「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大寶海」ということがある。それを、中国の曇鸞大師が、「願もつて力成じ力もつて願をなす。力・願相符うて畢竟じて差わず。これを成就という」こういうぐあいに云われる。

願もつて力を成ず、力もつて願に就く。願、徒然ならず、力、虚設ならず。

力・願相符うて畢竟じて差わず。かるがゆえに成就と曰う。(『教行信証』一九九頁)

つまり、力というものは、我々人間が、手こぶしを振り上げるような力ではない。それは、一切の人を平等に救いたいという、純粹なる本願がもとにあって、それが力になっておる。力で終わったのではなく、また力もつて願を成ずことは、その力が、益々、願を純粹化していく。そして、力と願とが相応しておるということを、本願成就という。こう

という言葉が、中国の曇鸞大師の『浄土論註』の中にある。それは、莊嚴不虛作住持功德という。それを現代語に私が訳すると、絶対に裏目にでない大きな功德だと、そういうことでございます。

(司会)

どうもありがとうございます。また、例月の聞法会で、先生にご質問される機会もたくさんございますので、是非ご参加いただいて質問の程、宜しくお願い致したいと思います。本日の質疑応答は、この辺で終了させて頂きたいと思えます。



## 〈感 話〉（昼食のお齊の最中にて）

（司会） お食事しながら結構なのですけれども、感話という形でお話を頂ければと思います。

ご指名させていただきますので、すこしお話いただきたいと思えます。まずは、平城さんからお話下さい。

（平城） 平城と申します。宜しくお願ひします。私は、皆さんにお話するというような、そんな、皆さんのお顔を拝見しましたら、とても私が、何かお話申し上げるといふような、そういう雰囲気というか、私自身が場違いのような感じが致しまして、本当にお断りしたのですけれども、もうあなたしか残っていません、というような・・・。それで、お近づきのしるしに、自己紹介でもしようかしらと思つて、お引受けといふか、お話することになりました。

私の家は、ここから一、二分といふか、その下の道を真っ直ぐ行くと、突き当ります、別所公園というのがあるのですが、その公園のバックネットのそばです。あまり近くて、遠くからいらつしやうている方には、申し訳ないなあと思つような時もあります。この坊守さんにお誘ひを頂いて、ノコノコとお世話になつたようなわけです。

私の主人は、今年で十二年目になりますけれども、小脳出血といふ病気で倒れまして、

大宮日赤病院で手術を受けまして、いのちはとりとめたのですが、小脳というのは、体の機能、運動神経とかみんな集まっています。ちよつと寝たきりになってしまいました。十年くらい病院に居たのですが、今年、老健施設ついでなのですが、そこに移りました。相変わらず同じような状態なのですが、体も弱ってきて、寂しい感じはしますけれども、なんとか健康を保っております。

それで、私は、子供と一緒に、一週間に一遍ですね、そこへ行きまして、洗濯ものとか受け取ってまいります。食べるものとかほしがるので、一緒にいろんなものを食べるのが楽しみです、そういうふうなわけです。子供とそこに行くのですけれども、子供もちよつと最近良くなって、精神の方か、頭の方か、ちよつとわからないのですけれども、訪問看護の人に週一遍、病院にも月一回とか、そんな感じで療養しております。

そういう話聞くと、すごく私が大変みたいにみえるのですけれども、客観的には、大変なのでしょうけれども、本人はまあ、それほど思つて下さるほど、たぶんですね、なんというか、楽観的というか、よくわからないですけれども、これが私の人生だと思つて、全部受け止めて楽しんでおうというふうな感じで、日々がんばっております。

もう一つ、私がおこに來るのでちよつと気にかかることがあります、それは、私の実家とか、主人の家が、真言宗なのです。川口の前川観音というのがありますけれども

も、観福寺っていうのですね。そこにお墓があります。その檀家になっておりまして、色々お世話になっております。それですけれども、私は、夫と同じお墓に入るのもいやだなあと思って（笑）、ちょっと色々ありましてね（笑）、勉強したりしたものですから、いやだなあ、なんて思っ、こっちのお墓に入りたいなあ、なんて思ったりして、迷ったりしてるのですけれども、今のところは子供もありますし、観福寺さんでもよくやってもらっているので、櫟先生のお話を聞きに来させてもらっているだけなのですけれども、ここでお話を聞いております。

前は、我聞の会も来ていたのですけれども、我聞の会でも色々勉強させてもらいまして、浄土の情景とかね、教えてもらいまして、すごく勉強になったのですけれども、今、櫟先生のところだけで・・・。

夕べ、考えてみましたら、七、八年になるのですね、ここにお世話になってから。やっぱり、長く勉強もしないし、仏さんに一生懸命頼りにするとか、そういう人間ではないのですけれども、鈍感なところもありますけれども、長くこういうところにお話を聞きに来るだけで、今はそのことの効果っていうか、すごく身に沁みております。人間的に厚みがでるような気持ちもしますし、何か、どこかで、仏さんに救われているんじゃないかなという、そういう気持ちが起くるのは、やっぱり、七、八年、ここになんとか

来て、お話を聞くだけだったのですけれども、そのおかげじゃないかなと思って、報恩講とかね、場違いな感じがしますけれど、ノコノコとやって来ております。そういう人間ですけれども、どうぞ、宜しく願います。

(司会) どうも有難うございました。本当にご近所で、聞法会にご出席頂きまして、本当に有難うございます。それから、もうお一人、重共さん、富山からお越し頂いて、一つお話しただきたいのですけれども、お願いします。

(重共) 重共です。富山の城端という所から来ました。櫟先生には、十年くらいお世話になって、お話聞いております。四年前まで、埼玉県の川口に住んでおりまして、毎月、櫟先生が見える度に、お話聞いて、光照寺さんにもお世話になっていました。僕の住んでいる城端ってところは、井波の瑞泉寺は有名なんですけれど、井波から二つほどとなりの町で、城端にも別院があります。それで、城端別院では、朝と昼、毎日お説教をやっていきます。そういうところは、東本願寺以外には無いそうです。城端地区も、十月、十一月は、報恩講シーズンで、毎日のように、あちこちで報恩講をやっています、特に声明に力を入れています。別院に、僕もたまにお参りするのですが、へたなこと言うと、あとから注意されたりします。

それで、城端、北陸地方は、蓮如上人で有名なところで、近くに、蓮如上人の弟子の赤

尾の道宗という人の出た、行徳寺というお寺があります。その宝物館には、蓮如上人の直筆の書とか、棟方志功の書があります。城端別院宝物館には、このあいだ初めて行ったのですけれども、親鸞聖人の直筆の小さな手紙があります。

報恩講、うちの近辺の報恩講は似てるのですけれども、二日間に亘ってありまして、うちの場合は、毎年十月の二十五日、二十六日なのです。二十五日の夜、七時半から初夜、その時は御伝鈔を詠みます。二十六日、次の日は、朝九時半と、午後の二時から、また二回やります。午後の二時から、登高座というのを、ちょっと珍しいと思います。で、声明には、かなり力入れています。聞法会は、光照寺さんみたいに、毎週のようにはやっていない。ほとんどのお寺もあまりやっていない。特に、その後の質疑応答なんかもやっていないので、やっぱり、関東地方の方が、非常に活発だと思います。

皆さん、ぜひ、富山に来られた時は、家に寄って下さい。土、日、祝日でしたら、蓮如上人のゆかりのお寺とか、ご案内しますので、また宜しく願います。

(司会)

すみません、今日は急に感話をお願いしまして。一度、重共さんのお寺にお参りさせていただいて、とてもいいところで、合掌造りのところで、お昼が食べられるところも案内してもらったりとか、忙しいところで案内していただきまして。皆さんも、ぜひ、近く寄りましたら、城端の重共さんのお寺、浄圓寺さんにお寄り下さい。

今日、施品に入れさせていただいた、櫛先生の『歎異抄』に仰ぐ現代人の救い」のご本は、開式前にご案内させていただいて、今日、ご参加の皆様は、特別、プレミアということ、施品に入れさせていただいたので、その案内を、勤行前にさせていただいたので、すけれども、この本を編纂された、柳川さんがおられるので、一言お願いします。

(柳川)

柳川と云います。この、『歎異抄』に仰ぐ現代人の救い」というのは、たまたま今年、白川さんという方が、私に、二十六年前の浅草の教区会館で、お話された時のテープをおこしたものが、自宅を整理していたら出てきたので、柳川さん、これは何か役に立てますかね、というような形で、練馬へ行くバスの中で渡されました。読みましたら、たぶん私も、このお話は聞いたと思うのですが、もったいなくて、二十六年前に聞いた方がいらつしやるかと思いますが、最近、櫛先生にお会いされた方で、聞いていない方がいらつしやったら、ぜひとも何か伝えたいなあという思いがしまして、何とか冊子にならないかと、いちおうパソコンに入力しまして、なんですか、もったいなくて、先生に、「先生、二十六年前には、これだけだったけれども、もし、今、まだもつと、みんなに伝えたいことはないでしょうか。」と云ったら、先生が、二部として、『歎異抄』にみえる現代人の救い」という文章を書いてくださいました。それで、二つをまとめて、一冊、『歎異抄』に仰ぐ現代人の救い」という名前で、冊子にしました。

私は、練馬の会で、「歎異抄聴記に聞く」という会をやっているのですが、曾我先生のご本はやはり難しいので、なかなか一冊読み終わられるかどうか、この一冊で、先生の願いというか、そういうことが、私には伝わってきたような気がしますので、是非とも読んでいただきたいと思います。以上です。宜しくお願いします。

(司会)  
本当に、すぐくまとまってまして、こちらにも有難く読ませていただきました。大切にさせていただきます。有り難うございました。

## あとがき

本書は平成二十二年十月三十一日、第二十回報恩講における櫟暁先生のご法話の記録です。

右記の年は報恩講二十回目という節目と同時に光照寺は二十周年を迎えるという記念すべき時を迎えました。櫟先生には、当寺の初期の頃よりご縁を頂きご教導賜りまして、誠に感謝致しております。本書のテーマを頂いてこのように十八冊目が刊行できますこと同朋とともに喜び得たいと存じます。

本書で触れています、櫟先生のお尊父様は、親鸞聖人の御遠忌に二回出遇っておられ、櫟先生も二回出遇うことが叶っておられます。長生きの功德と思えますが、それだけではなく、五十年に一度の大法要に二回出遇うことによって、本願念仏の教えがどのように頂けているか確認し出遇える勝縁は、かけがえのない喜びではないかと思えます。

本書にて先生は「御遠忌にお遇いするということは、単に、記念法要にお参りすることができたということでは、だめなのです。これは、親鸞聖人と同質の信心を得るということにおいて、初めて御遠忌に遇う意味があるのです。」とお話され身につまされる思いです。

二〇一一（平成二十三）年は法然上人が八百回忌のご法要を迎え、宗祖親鸞聖人は七百五十回



忌の御遠忌という大きな節目を迎えた年でした。しかし、思いもよらず、東北大震災（M九）という地震・津波・原発という自然災害と人災によつて、大混乱の只中にあつて御遠忌を迎える状況でありました。当寺は、三月の第一期法要が「被災者支援のつどい」という法要に変更された中での上山参拝でありました。この出来事は一生忘れられないものとなり、同時に浄土真宗、本願念仏のみ教えに触れさせて頂いていることの再点検、「浄土を顕かにする」ことをますます本腰を入れて、次回、五十年後の御遠忌に遇えるよう求道していきたく思っていることです。

先生には毎月当寺の会座でのご教化、並びに報恩講のご出講に深謝致します。また、ご多忙の中、原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様、校正を手伝ってくれた伊東良英氏に感謝申し上げます。合掌

平成二十三年十月三十日

第二十一回報恩講にあたり

光照寺 副住職 池田孝三郎